

【研究発表会冊子】

社会福祉法人 宝山寺福祉事業団

# 第 28 回研究発表会

「こども・ど・まん中」  
～いっしょに探そう、つながる支援～

《日時》 令和 7 年 1 月 26 日（日）

《会場》 生駒市コミュニティセンター 文化ホール

# 目 次

## 第 28 回宝山寺福祉事業団研究発表会 開催要項

### <<第一部>>

- 発表 1 「子どものできる！を見つけよう 自信に繋がる支援」  
～朝の準備の環境構成、視覚支援の有効性～  
児童発達支援センター仔鹿園  
副主任 貝 田 智 子  
保育士 永 田 佳 子 ..... 1
- 発表 2 「避難訓練から見えてきたこと」  
～災害時、私たちの仕事は何か 自衛消防組織の活用～  
いこまこども園 副主幹保育教諭 植 田 登世子  
保育教諭 上 嶋 智 子  
保育教諭 日 野 侑 紀  
保育教諭 泉 秋 香 子  
保育教諭 松 田 幸 子 ..... 13
- 発表 3 「こどもとともに生き立ちに向き合うⅢ」  
～ライフストーリーワークに取り組んだ10年～  
児童養護施設 愛染寮  
保育士 松 本 冴 加 ..... 21
- 発表 4 法人各施設のポスターセッションプレビュー（口頭発表）  
..... 33
- 講 評 帝塚山大学教育学部 教授 清水 益治 氏 ..... 32

### <<第二部>>

- 「地域へ発信する 小学校の役割」  
講師 生駒市立生駒小学校 校長 石 村 吉 偉 氏 ..... 41
- 宝山寺福祉事業団研究発表会一覧 ..... 42
- 宝山寺福祉事業団沿革 ..... 50
- 宝山寺福祉事業団概要図 ..... 54

## 第 28 回 宝山寺福祉事業団研究発表会 開催要項

テーマ「こども・ど・まん中」～いっしょに探そう、つながる支援～

### 1. 開催の趣旨

多様性を持つこどもたちが増える中、子どもや家庭を支えていくために昨年度、新たに国の機関として「こどもまんなか社会の実現」をコンセプトとしてこども家庭庁が発足しました。「こどもまんなか社会」とは、「常にこどもの最善の利益を第一に考え、こどもに関する取組・政策を我が国の社会の真ん中に据える」と定義されています。本事業団の児童部会は、それを今回のテーマとして掲げ、こどもを真ん中に据えて、さらに「いっしょに探そう、つながる支援」をサブタイトルとし、それぞれの場で日々実践、検討されているこどもへの配慮や支援、こどもを守る組織づくりを通して各施設から発表をします。皆様方の忌憚のないご意見を頂き、今後の事業の充実に活かしていきますのでよろしくをお願いします。

### 2. 主催 社会福祉法人 宝山寺福祉事業団

### 3. 後援 生駒市、奈良県社会福祉協議会、生駒市社会福祉協議会

### 4. 期日 令和7年1月26日（日） 12時30分～

### 5. 会場 生駒市コミュニティセンター 文化ホール

### 6. 日程 12:00 受付・開場 12:30 開会挨拶 宝山寺福祉事業団 理事長 辻村泰範

#### <第一部> 職員による発表

1. 児童発達支援センターこども支援センター 仔鹿園  
「子どもの出来る！を見つけよう、自信に繋がる支援～朝の準備の環境構成、視覚支援の有効性～」
  2. 幼保連携型認定こども園 いこまこども園  
「避難訓練から見てきたこと～災害時、私たちの仕事は何か 自衛消防組織の活用～」
  3. 児童養護施設 愛染寮  
「こどもと共に生き立ちに向き合うⅢ～ライフストーリーワークに取り組んだ10年～」
  4. 法人各施設のポスターセッションプレビュー（口頭発表）
- 講評 帝塚山大学 教育学部教授 清水益治氏

#### <第二部> 記念講演

講師 生駒市立生駒小学校 校長 石村吉偉氏 「地域へ発信する 小学校の役割」

# 子どものできる！を見つけよう 自信に繋がる支援

## ～朝の準備の環境構成、視覚支援の有効性～

○貝田智子 永田佳子（児童発達支援センターこども支援センター仔鹿園）

### I はじめに

#### (1) 仔鹿園とは

地域の障害児の健全な発達において中核的な役割を担う機関として主に就学前の児童を対象に集団・個別の発達支援を提供し、併せて、その家族への支援や指定障害児通所支援事業者、その他関係者への相談、専門的な助言を行っている

#### (2) 通園部クラス編成

年長	(4～6歳) A組	9名
	B組	9名
年少	(2～6歳) C組	10名
	D組	12名
未歩行	E組	4名

※発達の状況や特性に合わせて就学児が年少組に在籍することもある。

#### (3) 在園児の障がいの種類

自閉症、自閉スペクトラム症、ダウン症候群、ルビンシュタイン・テイビ症候群、知的障害

(令和6年度在園児)

#### (4) 指導で大切にしていること

- ①健康な体づくり
- ②基本的な生活習慣の確立
- ③遊びの充実
- ④言語能力を高める
- ⑤情緒を育てる
- ⑥個別療育相談

(ポータルページチェックリストの利用)

### II 目的

#### (1) 身辺面の取り組み

毎日の療育の中でも「基本的な生活習慣の確立」は子ども達が生活する上での基礎的な力をつけていく取り組みとして、重要だと考える。

子ども達は登園すると、持ち物を出し着替え・排泄と毎日決まった流れで行う(朝の準備)。日々繰り返し取り組むことで、基本的な生活動作を身につけていくことをねらいとしているが、なかなか身につかない子どももいる。

今回、基本的な生活習慣の中でも「朝の準備」を選んだ理由は、環境を変えたり、工夫したりすることで子どもの行動に顕著な変化がみられるのではないかと考えたからである。

#### (2) 研究の目的

「朝の準備」において、様々な障がい特性を持った子どもがいる中で、どうすればより効果的な取り組みができるのか、環境構成の再構築を行い、子どもの生活動作の習得への効果について検討することを目的とする。

#### ○朝の準備の流れ

(持ち物をリュックの中から順に出し、所定の位置に出す)

- ①連絡帳をかごに入れる
- ②シール帳をかごに入れる
- ③歯ブラシ・コップを袋から出し各かごに入れる

- ④カトラリー袋をかごに入れる
- ⑤ビニール袋からおやつタオルを出し、かごに入れる
- ⑥ビニール袋から手拭きタオルを出し、所定の位置に掛ける
- ⑦ビニール袋を所定の位置に入れる
- ⑧掛かっている着替え袋を取りリュックを掛ける
- ⑨着替える  
(排泄→自由遊びへ)

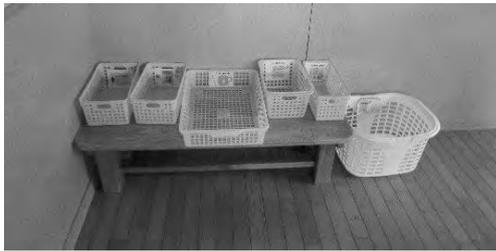


写真1：朝の準備①

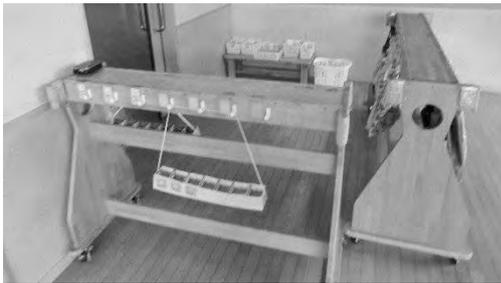


写真2：朝の準備②

### Ⅲ 研究方法

#### (1) 現状の把握（アセスメント）と改善点

各クラス（A・B・C・D）の「朝の準備」の様子を観察し、その取り組み状況を指標に分類し、現状把握を行う。その後改善点を職員間で話し合った。

表1：朝の準備の評価指標

<p>＜朝の準備の指標＞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 1人でできる</li> <li>② 声掛けされるとできる</li> <li>③ 手伝ってもらうとできる</li> <li>④ 手伝ってもらうと一部応じることができるが、やり切ることが難しい</li> <li>⑤ 援助に応じることが難しい</li> </ol>	
---	--

#### 1) 年長・A組（9名）

表2：A組の子どもの特性

	性別	学年	在園期間	DA <sup>1</sup>	DQ <sup>2</sup>	特徴
a1	男	5歳	1	1:9	31	1対1の援助が必要
a2	男	5歳	4	3:0	51	意識が逸れやすい
a3	女	5歳	2	3:2	57	意識が逸れやすい
a4	女	5歳	3	3:3	60	気分によってムラがある
a5	女	5歳	3	0:9	16	1対1の援助が必要
a6	男	5歳	3	2:2	41	マイペース、意識が向きにくい
a7	男	4歳	3	1:3	27	1対1の援助が必要
a8	男	4歳	3	1:10	41	マイペース
a9	男	4歳	3	2:8	61	意識が逸れやすい

\*DA：発達年齢<sup>1</sup>      \*DQ：発達指数<sup>2</sup>  
DA、DQは「遠城寺式発達検査」を用いた

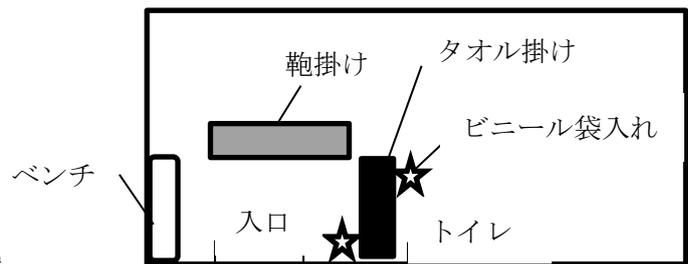


図1：A組の配置

<sup>1</sup> DA(Denvelopmental Age)とは、発達年齢をいい、その子どもの発達の状態が標準的な子どものどの年齢段階に相当するのかわを示す指標である。

<sup>2</sup> DQ(Denvelopmental Quotient)とは、発達指数

のことをいい、標準を100として子どもが実際どれだけ発達しているかを数値化したものである。発達指数(DQ)=発達年齢(DA)÷実年齢×100で算出される。

図1に示すように、準備を行う場所をタオル掛け等で囲い、取り組みに集中しやすくしているが、取り組み始めるまでに時間が掛かったり、途中で周囲の状況に気が逸れてしまったりして集中できない子どもが多い。

**改善点**

- ・場所は囲っていたものの、物を出す順番に導線が配置されていなかったため、整える必要がある。
- ・タオル掛け・鞆掛けの掛ける場所は月齢順になっており、意識が逸れやすい子どもが回り込んで掛けに行かないといけなくなっていたため、特徴に合わせた配置を考える必要がある。



**写真3：配置の様子**

個人差はあるが、1人で最後まで取り組める子どもはおらず、周囲の環境に惑わされ、気が散りやすい。準備をせず遊び出す子ども、特に途中で遊びに行ってしまう子どもが多い。

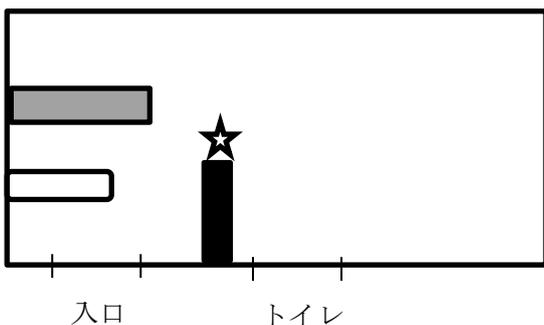
**改善点**

- ・導線が準備の順番に配置すると良い。
- ・準備用のベンチを壁に向けて配置することで、気が散りにくくなるのではないかな。
- ・タオル掛けの向きなど月齢順にとらわれず、子どもの技量に応じて配慮すると良い。

2)年長・B組 (9名)

**表3：B組の子どもの特性**

	性別	学年	在園期間	DA	DQ	特徴
b 1	男	5歳	3	2:3	40	こだわりが強い
b 2	男	5歳	4	2:7	48	気が逸れやすい
b 3	男	5歳	2	2:1	39	気が逸れやすい
b 4	男	5歳	2	3:0	53	気が逸れやすい 衝動的
b 5	女	5歳	3	1:6	30	1対1の援助が必要
b 6	男	5歳	4	2:6	49	マイペース
b 7	男	5歳	3	2:8	53	気分のムラが激しい
b 8	男	4歳	3	1:7	32	1対1の援助が必要
b 9	女	4歳	2	2:11	46	こだわりが強い



**図2：B組の配置**

3)年少・C組 (10名)

**表4：C組の子どもの特性**

	性別	学年	在園期間	DA	DQ	特徴
c 1	女	5歳	4	1:2	23	手先が不器用 集中力が欠ける
c 2	男	4歳	2	1:2	28	1対1の援助が必要
c 3	男	4歳	2	0:9	22	1対1の援助が必要
c 4	男	4歳	2	1:1	27	多動、1対1の援助が必要
c 5	男	3歳	2	1:5	38	大人に頼りがち 手先が不器用
c 6	男	3歳	2	1:7	48	大人に頼りがち 手先が不器用
c 7	男	3歳	1	1:1	31	多動、1対1の援助が必要
c 8	男	3歳	1	1:6	48	多動、こだわりがある
c 9	女	2歳	1	1:8	58	集中力が欠ける
c 10	男	2歳	1	1:6	54	集中が持続しない、経験不足

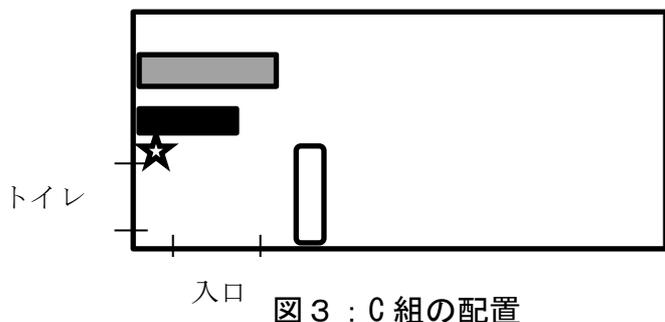


図3：C組の配置

年齢が低く、初めて集団生活を経験する子どもがいる為か、集中して朝の準備に取り組める子どもが少ない。物を渡す、所定の位置を声掛けや指差しで示す援助が必要。また、準備を終えて遊んでいる子どもの様子が気になり、準備の途中で玩具の方に行ってしまうたり、遊んでいる子どもが準備スペースに来てしまったりする等、子どもが入り混じってしまう。

#### 改善点

- ・玩具が見えないようにする配置の工夫が必要。
- ・準備をする子どもと終わった子どもが入り混じらないように、スペースを区切る必要がある。
- ・子どもが動く導線を短くすることで、集中して朝の準備に取り組むことができるのではないか。
- ・なるべく1対1で保育者が傍につき、子どもの特性や取り組み状況を踏まえた援助をすることで、強化していけるのではないか。

#### 4) 年少・D組 (12名)

表5：D組の子どもの特性

	性別	学年	在園期間	DA	DQ	特徴
d 1	女	5歳	3	1:2	22	気が散りやすい
d 2	女	4歳	3	2:4	50	気分にもらがある
d 3	男	4歳	2	1:8	39	気が散りやすい
d 4	男	4歳	2	1:1	27	1対1の援助が必要
d 5	男	4歳	1	2:8	64	こだわりがあり衝動的
d 6	男	4歳	2	1:2	29	周囲の声に敏感で こだわりが強い
d 7	女	3歳	1	2:6	66	こだわりが強く 気分にもらがある
d 8	男	3歳	1	1:2	29	こだわりが強い
d 9	男	3歳	2	2:4	66	気が散りやすい
d 10	男	3歳	1	1:9	53	気が散りやすい
d 11	男	3歳	1	0:9	25	1対1の援助が必要
d 12	男	2歳	1	1:5	48	気が散りやすい

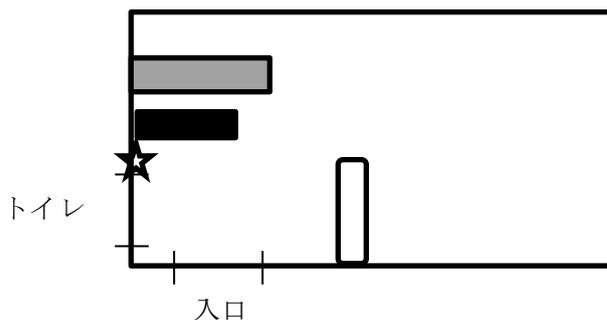


図4：D組の配置

自分から準備に取り組むことができる子どもはおらず、準備をせずに遊ぶ子どもや促されると取り組むが途中で中断してしまう子どもが多い。先に登園して準備を終えた子どもと後から登園した子どもが同じ空間に居るので、集中して取り組むことが難しい環境である。

#### 改善点

- ・「準備をする」「着替える」「遊ぶ」それぞれの活動の空間を分ける。また導線を作る等をして、集中して取り組みやすい環境を整える。
- ・準備の1つ1つの動作をしやすいように

十分なスペースを設ける。

- ・壁に沿う導線にすることで、周囲に目がいくのを防ぎ、視覚的にも集中しやすくする。
- ・座り込むと集中しにくいいため、立った状態で準備物をかごに入れられるように、高さ 50 センチほどの机（園児机）を使用する。

## 5) 改善点のまとめ

<年長クラス>

- ①導線を考えた配置
- ②集中して取り組める環境
- ③月齢にとらわれない配置

<年少クラス>

- ① 活動空間を分ける
- ② 十分な活動スペースを設ける
- ③ 導線の工夫
- ④ 特性を踏まえた援助

- E 組に関しては、未歩行の子どものため、今回の研究対象からは外すこととした。

## (2) 環境構成を変更しての取り組み

準備する際の導線を良くするために、準備物を出すかごを置くベンチの位置と、タオル掛け、鞆掛けの配置を変更した。活動空間を区切り、準備スペースと着替えスペースを明確にする。一定期間取り組み、取り組み状況の変化を表1の指標に基づき分類する。

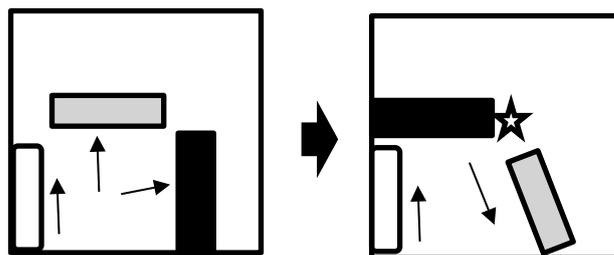
## ●取り組み期間

令和6年6月10日～7月10日

### 1) 年長・A組の取り組み

タオル掛けと鞆掛けの位置を入れ替え、左から順番に物を出したり掛けたりできるようにした。月齢順ではなく、子どもの

様子に合わせて手前側と奥側に配置を変更した。



- — 準備物を入れるかごを置くベンチ
- — 鞆掛け
- — タオル掛け
- ★ — ビニール袋入れ  
(タオルが入っていた)

図5：A組の環境構成の変更

### 子どもの様子

準備途中で集中が切れてしまい、遊びに行ってしまう子どもが、タオル掛け、鞆掛けの掛ける位置を変更したことで、スムーズに掛けることのできるようになった。

### 考察

- ・タオルや鞆を掛ける場所については、意識が逸れやすい子どもが、視覚的に確認しやすくするために、手前側に変更したことで、奥に回り込んで掛けに行く際に玩具に気を取られてしまうことが少し減ったと考えられる。

### 2) 年長・B組の取り組み

図6に示すように家具の配置を変更し導線を変えた。また、着替えスペース・遊びスペースを設けた。

月齢順に配置されていたフックを個々の発達に合わせて並び変えた。

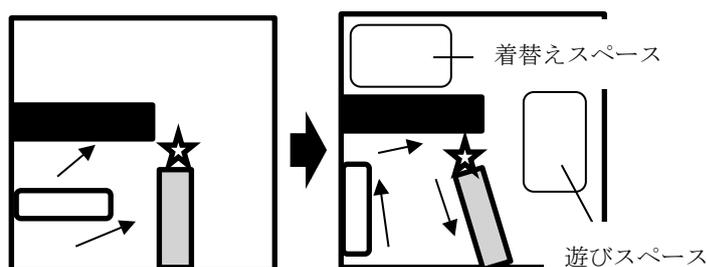


図6：B組の環境構成の変更

## 子どもの様子

- ・最後まで取り組めなかった子どもが、気が散りにくくなり、準備を中断せずに終わらせることができようになった。
- ・着替えスペースを設けることで、進んで着替えに移る子どもの姿があった。
- ・準備物を手渡しするなどの援助が必要な子どもも半数いた。



写真2：準備の様子

## 考察

- ・導線が準備物を出す順番になっていることで、子どもが動きやすくなった。
- ・タオル掛けが自由遊びスペースを遮断し見えにくくなっていることで、最後まで取り組める子どもが増えた要因の1つである。
- ・月齢順の配置になっていたフックの配置を個々の技量に合わせた配置に変えたことで、更に準備ブース内でやり切ることができるようになった。
- ・準備物を手渡し援助が必要な子どもが多いので、視覚支援を取り入れ、子どもが自発的に取り組めるようにしていきたい。

### 3) 年少・C組の取り組み

図7に示すように、家具の配置を変更し、導線を短くした。また、準備スペースと遊びスペースを区切った。

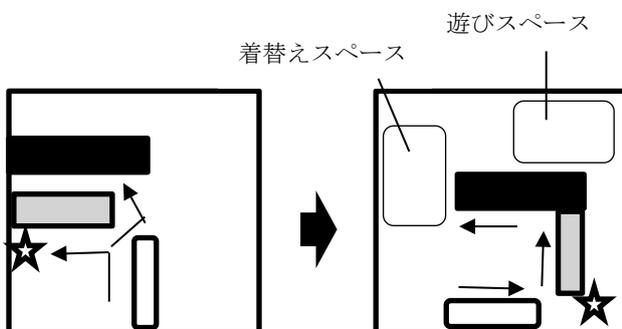


図7：C組の環境構成の変更

## 子どもの様子

- ・導線を短くしたことにより、集中しやすくスムーズに準備ができるようになった子どもがいた。
- ・準備スペースと遊びのスペースを区切ったことで、子どもがあちこちに散らばることが減り、誘導しやすくなった。
- ・着替えスペースの認識ができるようになった。
- ・ビニール袋入れのスペースが狭く混雑しがちだった。
- ・準備スペースをコンパクトにしたことにより混雑する場所があった。
- ・順番や流れの意識が薄く、ぶつかり合う子どもがいた。

## 考察

- ・導線は良いが、ビニール袋入れのスペースが狭く混雑しがちなので工夫が必要。  
⇒タオル掛けのフックの真下に一人ずつのビニール袋入れの箱を設置して改善した。
- ・順番を意識せずに準備物を出そうとする子どもが多くぶつかり合うこともあるため、順番が意識できるような番号表示などの視覚支援が必要。
- ・声掛けされると準備ができる子どもは、視覚支援を入れることで、順番を意識したり、1人でやり切ることができるようになるのではないかと。

#### 4) 年少・D組の取り組み

図8に示すように、活動スペースを分かりやすく区切った。また、着替えスペースにマットを敷いて場所を分かりやすくした。

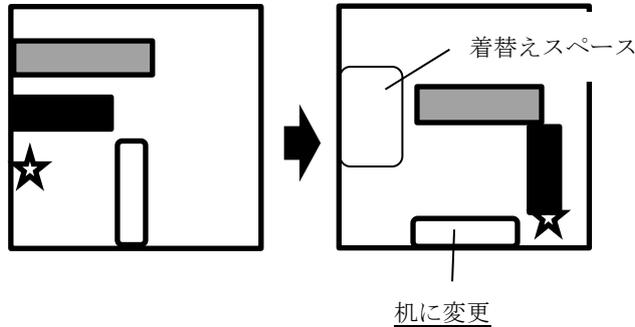


図8：D組の環境構成の変更

#### 子どもの様子

- ・自分でできることが増えた子どもの姿があった。
- ・流れができたことで、やり切らずに終わっていた子どもも、続きに取り組みやすくなった。
- ・着替えの場所を明確にしたことで、自分で着替えを意識できる子どもが出てきた。

#### 考察

- ・保育者が、個々の動きが見やすくなったことで、子どもの姿を把握しやすく適切な援助ができるようになった。
- ・机の下に入ったり、走り回ったりする導線ができてしまった。  
⇒机をベンチに変更することで改善をした。

#### (3) 視覚支援の導入

準備物を出す場所や順番を分かりやすく伝える為に、出すかごやタオル掛けなどに数字の入ったイラストのカードを提示した。一定期間取り組み、取り組み状況の変化を指標に基づき分類した。



写真5：視覚支援の導入①



写真6：視覚支援の導入②

#### ●取り組み期間

令和6年7月16日～8月16日

#### 1) 年長・A組の取り組み

#### 子どもの様子

- ・何人かの子どもは絵カードを見るものの、取り組みにはあまり影響がなかった。
- ・プール遊びの有無で準備のスピードに差が見られる子どもがおり、視覚支援の影響を受けていなかった。(プール遊びがあるので、準備を早くしようと声掛けされると意欲が高まり準備のスピードが速くなった)

#### 考察

- ・以前から視覚支援カードを貼る取り組みを行っていた在園児が多く、朝の準備についてある程度理解している子どもが多かったため、視覚支援の有無での影響があまり見られなかったと思われる。

- ・絵カードはそれぞれのかごの前やラックに貼っていたが、並べて貼ることで、意識が逸れにくくなるのではないか。
- ・数字に興味のない子どもについては、絵カードにキャラクターなどを追加することで、絵カードを意識するきっかけになるのではないか。
- ・準備が終わった子どもは自分の写真カードを所定の場所に貼るなどすることで、取り組みに意欲が持てる可能性がある。

## 2) 年長・B組の取り組み

### 子どもの様子

- ・数字を見て言う子どもはいたが、特に意識している様子はなく、準備物を手渡しする等の援助が必要な子どもがいた。
- ・プール遊び期間であった為、素早く着替えまで取り組める子どもがいた。

### 考察

- ・絵カードに順番を意識する数字が書かれてあったが、一つひとつ区切られていることで継続した取り組みになりにくい。一覧表にすることで、取り掛かりがスムーズになる子どもがいると考えられる。
- ・年長児は準備の経験も長いため、変化が分かりにくかった。

## 3) 年少・C組の取り組み

### 子どもの様子

- ・絵カードを意識できる子どももいれば、できない子どももいる。指を差して確認する子どもが出てきた。
- ・出す順番の表示はあるが、その通りではなく鞆の中身の上から物を出す子ども、出したい物から出す子どもがいた。
- ・繰り返し取り組むことで、流れはスムーズになっていた。
- ・後半に登園する子どもの中には、遊びのスペースが気になり準備に集中できない子どもがいた。

### 考察

- ・数字の理解ができていない子どもが多いことと、認知の高い子どもは順番にこだわらなくても空いている場所を探して入れていくことができることから、番号の表示は現段階ではあまり有効性はなかった。

## 4) 年少・D組の取り組み

### 子どもの様子

- ・取り入れた直後は目新しさがあり、興味を示す姿がみられた。
- ・かごを置くベンチを壁際に設置したことで、ベンチに登ったり、壁の掲示物を触ったりする子どもが出てきた。

### 考察

- ・壁に貼った絵カードは、保育室に入っただけですぐに目に付かないので、取り掛かりを促す効果は見られなかった。
- ・タオル掛けや鞆掛けの絵カードの場所が子どもからは視界に入りにくく、効果が薄かった。工夫が必要と考えられる。
- ・保育者が動作を促すツールとしては有効で、援助がしやすくなった。

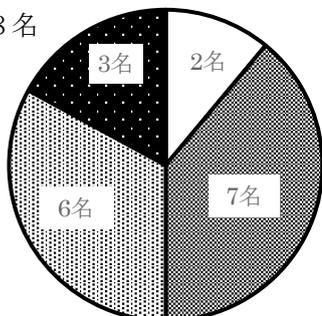
#### IV 結果・考察

##### (1) 取り組み前から環境構成の変更及び視覚支援の変更後の結果

###### i) 年長児

6月上旬調査

年長児18名

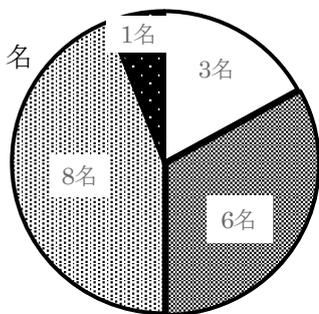


- ひとりできる
- 声掛けされるとできる
- 手伝ってもらえるとできる
- 手伝ってもらえると一部応じるがやり切るのは難しい
- 援助に応じるのが難しい

図9：年長児取り組み前

7月10日

年長児18名

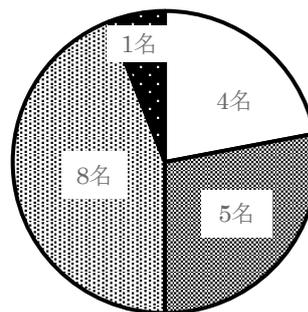


- ひとりできる
- 声掛けされるとできる
- 手伝ってもらえるとできる
- 手伝ってもらえると一部応じるがやり切るのは難しい
- 援助に応じるのが難しい

図10：年長児の環境構成の変更後

8月10日

年長児18名



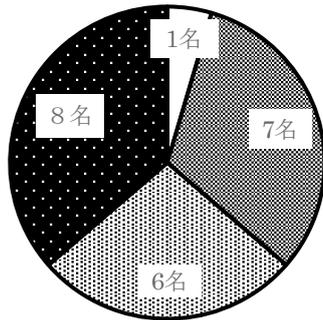
- ひとりできる
- 声掛けされるとできる
- 手伝ってもらえるとできる
- 手伝ってもらえると一部応じるがやり切るのは難しい
- 援助に応じるのが難しい

図11：年長児の視覚支援導入後

- ・「ひとりできる」子どもの割合は、2つの取り組みをする度に増えている。
- ・環境構成を変更し、集中できる環境を整えたことで、手渡しや指差しの援助（＝手伝ってもらえるとできる）が子どもに伝わりやすくなったのではないかと考えられる。
- ・視覚支援の取り組み後の変化はあまりなかった。年長児は「朝の準備」の経験が長いため、あまり視覚支援の影響はなかったと思われる。

ii) 年少児

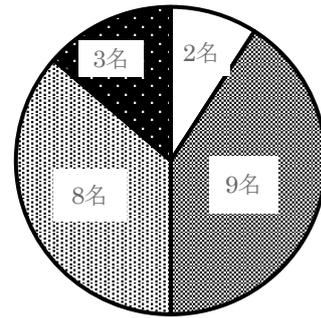
6月上旬調査  
年少児 22名



- ひとりできる
- 声掛けされるとできる
- 手伝ってもらおうとできる
- 手伝ってもらおうと一部応じるがやり切ることが難しい
- 援助に応じることが難しい

図 1 2 : 年少児取り組み前

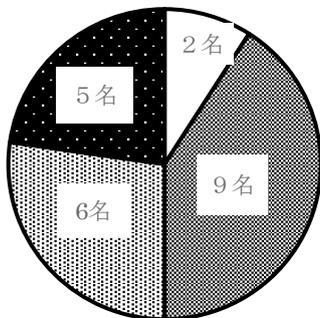
8月10日調査  
年少児 22名



- ひとりできる
- 声掛けされるとできる
- 手伝ってもらおうとできる
- 手伝ってもらおうと一部応じるがやり切ることが難しい
- 援助に応じることが難しい

図 1 4 : 年少児視覚支援導入後

7月10日調査  
年少児 22名



- ひとりできる
- 声掛けされるとできる
- 手伝ってもらおうとできる
- 手伝ってもらおうと一部応じるがやり切ることが難しい
- 援助に応じることが難しい

図 1 3 : 年少児環境構成変更後

- ・環境構成を変更したことで、子どもの集中力が上がったことはもとより、保育者の声掛けがより聞こえやすくなり「声掛けされるとできる」子どもの割合が増えたのではないかと。
- ・視覚支援の取り組み後に「手伝ってもらおうとできる」の割合が増えている。絵カードや表示があることで、入れる位置などを誘導しやすくなったことが要因の1つとして挙げられる。

### iii) 全体の指標の変化

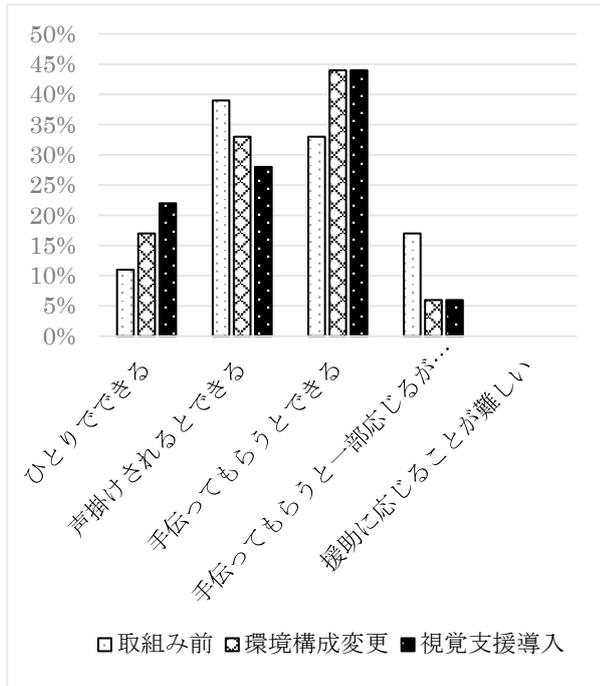


図 15 : 指標の変化 (年長児)

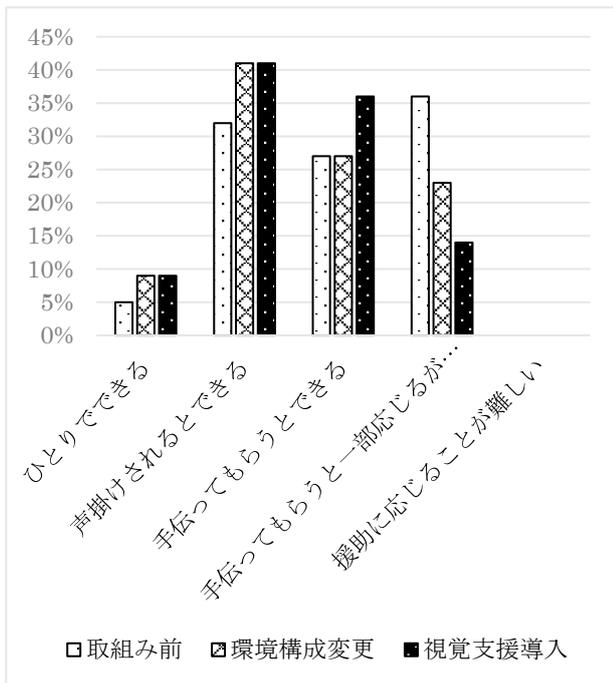


図 16 : 指標の変化 (年少児)

- ・ 取り組みを始める前の指標から比べると、「ひとりのできる」「声掛けされるとできる」の2つの割合が多くなっている。保育者の援助が少ない状態で子どもが自ら取り組みを進める力が上がってきている

ことが分かる。

- ・ 環境構成変更後に視覚支援導入の取り組みを行ったが、指標的にはほとんど変化はみられていない。子どもの様子を見ると、絵カードがあることで、それと同じものを鞆から出そうとする姿が出てきたり、数字を追って順番に鞆から出そうとしたりする姿もあった。一方で保育者が絵カードに注目を促しても、それを注視することは難しい子どもがいたことも事実である。視覚支援が有効である子どもとそうでない子どもがいたことがこの結果になったと推測される。

## V 結論・今後の課題

長い歴史ある仔鹿園では、受け継がれてきた療育の環境構成や支援方法があり、クラスごとに修正や変更はありながらも、園全体での大きな見直しはこれまであまりなかった。その時々で1番良いと思われる支援や環境作りが試されてきたのだと思われる。

今回の研究に取り組むことで、今までの実践のどこに課題や改善点があるのかを考え、より良い支援方法を全体で考えるきっかけとなった。また、「朝の準備」に対する共通認識を持ち、統一した支援ができるようになったという利点もある。また、2つの取り組みを導入し、指標を設けて分析することで、子どもの様子や動きをより客観的にみることができ、根拠に基づいた支援に繋がったのではないかと考える。更に、子どもの様子や動きの変化と同様に保育者の援助の仕方にも変化がみられ、より個々に合った支援ができるようになったと実感した部分も大きい。

一方で、新たな問題点や改善点もみえてきた。今回の取り組みでは「朝の準備」のスキルを上げることを目的として環境

構成を見直した為、他の部分で支障が出た面もあった。例えば、タオル掛けの位置は、排泄手洗い後に使用することから、トイレ出入口の近くに配置されていた。しかし、今回は持ち物の準備をスムーズに行うことを重視した為、トイレの出入口からは離れての配置となった。また、集中できる環境を作る為に準備スペースを囲うような配置に変更した為、全体を見渡しにくく、死角ができてしまうことにもなった。

まだまだ改善すべき点はあるが、本研究で得たことを活かし、クラスと言う小集団でありながらも、より個々に応じた支援を行えるように取り組みを工夫し、子どもと共に成長できるように日々の療育に取り組んでいきたいと考える。

# 避難訓練から見えてきたこと

—災害時、私たちの仕事は何か 自衛消防組織の活用—

○植田登世子、上嶋智子、日野侑紀、泉秋香子、松田幸子（いこまこども園）

## I はじめに

日本は複数のプレートの境界に位置するため、世界でも有数の地震多発地帯であり、世界で起こっている1割に当たる地震が日本とその周辺で発生している<sup>1)</sup>。表1で示すとおり近年震度4以上の地震が多発している。また、東日本大震災や能登半島地震では、最大震度7が観測され甚大な被害をもたらされた。西日本に住む私たちは、南海トラフ地震にも備えていく必要がある。

今後、保育活動の時間中に発生することは十分考えられる。しかし、日頃からの心構えや災害備蓄などの準備を整える事で、被害を最小限にすることを目指す。

本園では、3年前に避難訓練係を発足し、訓練後の反省会で見直しや改善策について話し合いを行ってきた。その中で、より質の高い訓練ができるよう、様々な想定を設定し取り組んでいる。

表1: 2024年8月以降震度4以上の地震

日時	震源地	最大震度
2024年09月26日16時01分頃	釧路沖	4
2024年09月24日22時09分頃	留萌地方	4
2024年09月20日21時22分頃	豊後水道	4
2024年08月19日00時50分頃	茨城県北部	5
2024年08月19日00時48分頃	茨城県北部	4
2024年08月15日20時20分頃	神奈川県西部	4
2024年08月09日19時57分頃	神奈川県西部	5
2024年08月08日16時43分頃	日向灘	6
	宮崎の東南東30km付近	

出典: 日本気象協会

## II 令和3年度からの取り組み

### (1) 災害発生時刻、発生場所の想定

(令和3年度)

3年前より、本園では事前に発生時刻を知らせずに避難訓練を行っている。<sup>1)</sup>防災研修にて、時間指定せず大まかな告知のみをすることで、それぞれが考え、防災意識が高まるという話があった。時間指定をしないことにより、訓練のための避難準備をすることなく、緊張感を持って実際の災害時と同じ動きで子どもの誘導、荷物確認等ができるようになった。また、これまで想定していなかった場所を災害想定場所にすることで、職員間で避難経路や災害時の職員の配置について事前に話し合いをする時間をもち、安全かつ連携のとれた避難ができるようになった。

### (2) 訓練後の係での話し合い(令和3年度)

係が発足されるまでは、毎回、訓練後の報告書を記入し提出するだけであったが、係の発足後は、訓練当日に係が集まって話し合いをし、訓練中に気付いたことや困ったこと、良かった点や改善点などを話し合うようになった。係での話し合いの前に、各クラス、学年で反省等を意見交換し、話し合い後報告をするので、職員全員が訓練の見直しをするようになった。訓練を通し、必要である備品等について各自が意見を出し合い検討した。救急セットや書類を持ち出す際に必要になるリュックサックは、全職員が分かるよう同一の鞆を購入した。救急セットは常に必要な物を入れておき、迅速な対応ができるようにした。また、クラス名は鞆の同じ場所を書くことで確認作業の時間短縮につなげた。

<sup>1)</sup> 「今の避難訓練それでいいの？」～命を守る訓練とは～ 一般社団法人保育の寺小屋 藤實智子

### (3) 階段(令和4年度)

災害時の混雑を避けるために階段の使い方を見直した。避難時だけでなく、普段から右側通行が意識できるよう、階段に赤と水色のビニールテープを貼ることで、緊急時にどちらの色の方を通行すればよいか、子ども達も分かりやすくなり、安全に避難できるようになってきている。

### (4) 防災ってなあに？(令和5年度)

月に一回「防災ってなあに？」を合言葉に防災について学ぶ時間を保育の中に組み入れた。防災ダンスや○×ゲームなどを通して、職員だけでなく子どもたちの防災意識も高まるよう活動を行っている。

災害後は、不安定な場所を歩くことが想定される。そのため「防災サーキット」(図1)では子どもたちは狭い空間や不安定な物の上を歩くなどの経験をした。狭い空間は園にある赤いベンチを並べ、その下をくぐった。1つならば楽しくくぐれてもいくつか並ぶと手足を動かすのに苦労している子どもがいた。不安定な物の上は、卵パックに加えて牛乳パックも置いてみた。口の開いた牛乳パックの底は硬いが他は体重がかかると形が変形し、バランスを取るのが難しいようであった。どの子どもも初めての経験で戸惑っている様子も見られたが、友だちと一緒にアスレチック感覚で楽しんでいた。幼児クラスは常に上靴を履いているので、それも災害時の備えの一つになっていると感じた。



図1: 防災サーキットの様子

乳幼児期は、心身が著しく成長する時期である。したがって、この時期から遊びや生活を中心とした保育活動を通して防災について学んでいくことは、将来、適切な防災行動の理解・実践に役立つと考えられる。<sup>2)</sup>

## Ⅲ 研究動機

毎月の避難訓練や訓練後の話し合いを繰り返す中で、災害発生時から全園児が避難する場所までの園児の誘導や安全確保は速やかな判断ができるようになり、各々が責任感を持って行動するようになってきた。しかし、その後はどうするのか、どのような仕事があるのかについてまで周知はできておらず、スムーズな動きやマニュアルを把握した上での臨機応変な行動をとることに不安を感じるという意見が話し合いの中で多く挙がった。

そこで、各自の仕事を分かりやすく可視化することで、緊急時でもスムーズに、かつ安全に職員が動ける体制を構築させていけるよう取り組みを始めた。

## Ⅳ 目的

地震はいつどこで発生するか予測することはできない。その時、子どもたちや職員の命を守るために私たちがすること、私たちの仕事は何かを明確にしていく。そのための有効な手段の一つとして、消防計画に基づき設置している自衛消防組織を防災にも活用することである。災害時、全職員が園内にいるとは限らず、限られた人数で避難誘導することも考えられる。自衛消防組織が災害時にも有効に機能するよう、体制づくりや訓練の工夫等の園内の取り組み事例についてまとめる。

## V 方法

### (1) アンケート調査による実態把握と比較

【1回目】避難訓練についてのアンケート

【2回目】災害シミュレーション

### (2) 職員間による意見交換

【3回目】意見交換後のアンケート

### (3) 自衛消防隊編成表の見直しと作成

## VI 取り組み

### (1) アンケート調査による実態把握と比較

#### 【1回目】令和6年6月

○避難訓練についてのアンケート

・3年間の取り組み(災害発生時刻を指定しない、新たな発生場所の想定、訓練後の係での話し合い)の中で、職員の意識がどのように変化し、行動となって表れているかについてアンケートをとり、令和3年10月の結果と比較した。(図2)

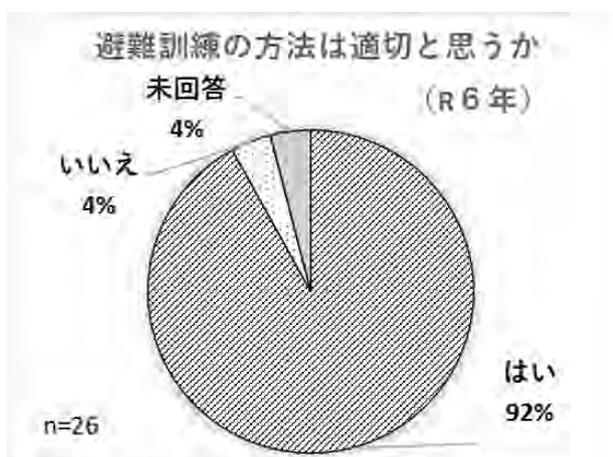
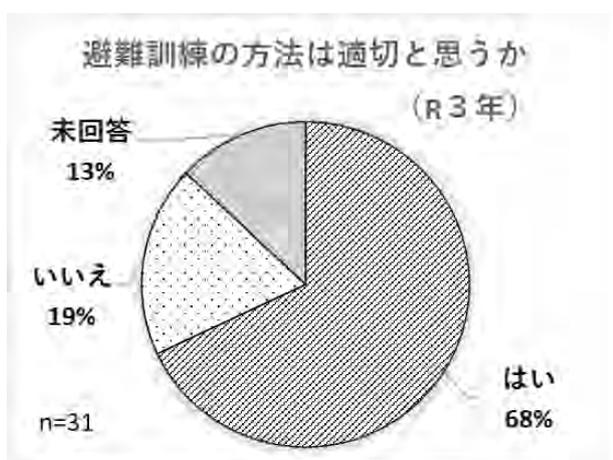


図2: 避難訓練の内容は適切か

### (アンケート結果)

「適切」が増えた主な理由として、自由回答欄の記述内容に以下のようなものがあった。

- ・時間指定がなくなり、より緊張感のある訓練となっている。
- ・様々な想定、発生場所の訓練が増えたことにより、クラス担任間で避難ルートや子どもたちへの指示を考えるようになった。

しかし、避難訓練が適切に行われていると考えながらも、自由回答欄には以下のような不安点も出ていた。

- ・非常食の種類、数の最新の状況を把握しておく必要がある。
- ・災害時、職員は責任をもって各自の役割をはたせるのか。その際に必要なのは自衛消防編成表ではないだろうか。
- ・大きな災害を経験したことがないため、実際に起きた時に正しい判断をすぐにできるか不安。

そこで、各職員が災害時に関する不安な点を出していき、解決策や防災への意識をより高めるためにはどのようにすればよいかを考えた。

#### 【2回目】令和6年9月

○災害シミュレーションのアンケート

・1回目のアンケート結果より、実際に災害が起きた時の職員(自分)の動きに不安があるという回答が多く見られたことと、「職員の防災意識を高めるためにどのようなことをすればよいと思うか」の回答に「災害シミュレーションをすればよいのではないか」という意見があった。訓練の次のステップとして取り入れてみた。今までのアンケートは実際の避難訓練に対しての質問が主だったが、大きな災害(震度4以上)は、勤務中に経験のない職員も多いので、自分で調べ、考えて回答するという方法を提示し、自衛消防編成表に則って自分の

仕事や各係の仕事を考えた。

- ・シミュレーションをする前とした後で、自身の防災や避難訓練に対する意識や不安が減ったかを比較した。(図3)

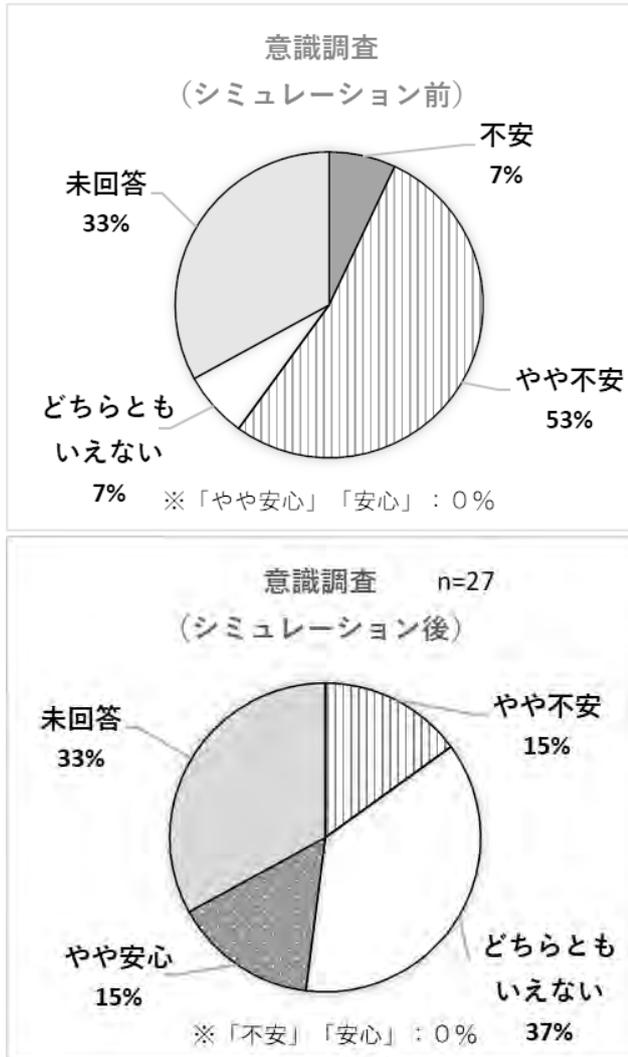


図3:シミュレーション前後の意識の変化

### (アンケート結果)

自由回答欄の記述内容に以下のようなものがあった。

- ・今回のアンケートは、自分で調べて考える、予想するという意味で良い機会になった。
- ・今後も、様々な想定でシミュレーションして、自分だけでなく他の職員の動きも考えることで、実際に災害が発生した際に、戸惑うことなく行動できると思う。
- ・自衛消防編成表に基づいた自分の仕事に不安がある。

### (2)職員間による意見交換(令和6年10月)

常勤職員のみを対象。職員を3グループに分けて、様々な視点で新たな気づきにつながるよう、意見を出し合い共通理解をすることを目的に話し合いをした。

Aグループ:4人、Bグループ:7人、Cグループ:8人(勤務状況により人数には偏りがある)。司会は毎回参加し、趣旨、災害想定、タイムキーパーを行う。災害想定は、震度4以上の地震とし、災害が発生した際に予想されることや不安に感じていること、自衛消防隊の各班ですべき仕事等、自由に意見を出し合った。経験年数の違う職員が集まったことで、若い職員が意見を出しにくいことも想定できたため、KJ法(付箋に思いつく事を書き、出てきた意見を分類し1枚の紙に貼る)を用いて話し合いを進めた。グループのメンバーの意識や経験年数等の違いからか、話し合う内容が少しずつ違い、様々な意見が出た。

#### 【Aグループ】

- 現状の訓練の確認と見直しを中心としながら仕事を分類していた。
- ・災害直後に担任がすることと安全確保後に各班がすることに分け、仕事を班分けしていた。
- ・現状の訓練の確認と見直しを中心としながら話し合いを進めていた。
- ・園内の消火器の場所を全員が把握する。
- ・AEDの練習、非常食を食べるなどの新しい試みについての意見があがった。

#### 【Bグループ】

- 仕事を各班に分類し、必要に応じて新しい班を作成していた。
- ・全員の意見を出し合ったところ、避難後必要になる食糧班、救護班、必需品班、連絡班に集中していた。
- ・非常食の中には離乳期の子どもの食べられる物があるのか。

- ・保護者への引き渡しの際に必要なになってくる緊急連絡カードの持ち出し方法。

### 【Cグループ】

- 問題点と改善策を中心に、他のグループにはなかった視点からの意見が多数出た。
- ・災害グッズの軽量化。
- ・乳児は靴を履かずに安全な場所まで避難するが、足の裏の怪我が心配。
- ・災害後の子どもの心のケア、近隣地域との連携についても話し合いがあった。

グループによって話し合いの内容は少しずつ違ったが、どのグループも共通していたことは、自衛消防隊編成表の再編成、各班の仕事を明確にする、新たな仕事の分類化についての意見であった。

### (3) アンケート調査

#### 【3回目】 令和6年11月

- 職員間による意見交換後のアンケート
- ・意見交換をして良かった点、改善点、避難訓練に対する不安や防災意識への変化についてアンケートをとった。
- ・意見交換会を行う前と後で、災害時の避難に対する自身の仕事について不安はなくなったように感じるか。(図4)

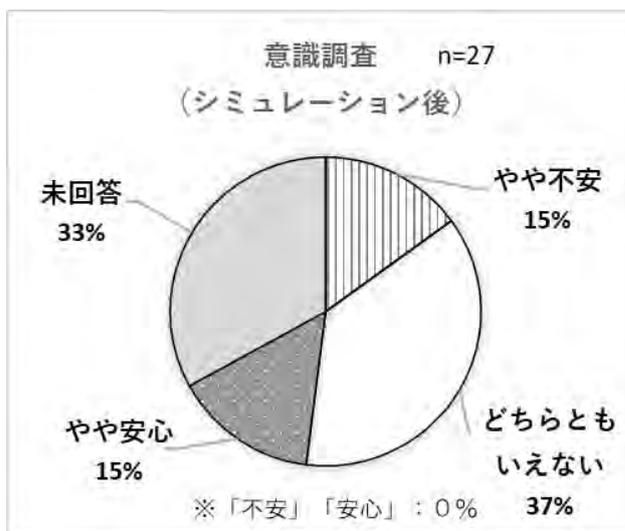
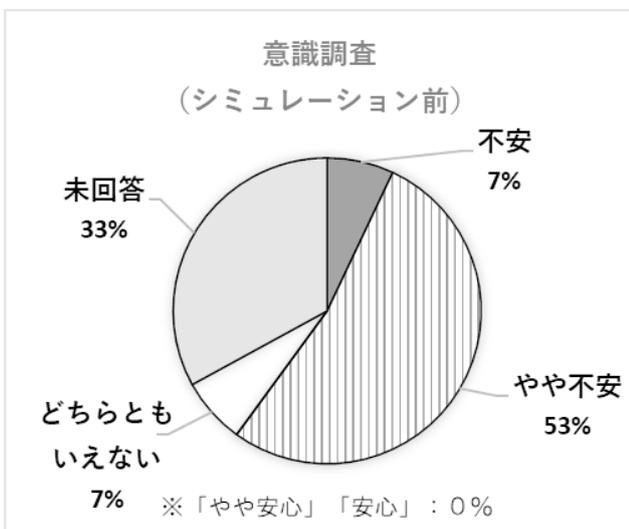


図4:意見交換会前後の意識調査

### (アンケート結果)

自由回答欄の記述内容に以下のようなものがあった。

- ・皆で書き出した意見を全員で分類していく時間が有意義であった。
- ・自分自身の役目は何であるか改めて考える良い機会になった。
- ・不安が完全になくなったわけではないが、他の職員と意見を交わす中でどのような行動をとればよいか、おぼろげながらイメージできるようになってきた。
- ・漠然としていた不安が話し合いをしたことで具体的になり、解決策が見えてきた。
- ・他の職員の意見を聞く機会がほぼないので先生方の考えを知る機会になった。

### (3) 自衛消防隊編成表の見直し

- ・3回のアンケートや職員間による意見交換の結果を元に、避難訓練係が中心となって自衛消防隊編成表の見直しを行った。
- ・現状の編成表では、5つの班分け(通報連絡班・消火班・警備班・避難誘導班・救護班)がされている。表にはリーダーの名前は入っているが、その他の職員は避難誘導班に所属となっており、実際にどのような動きをすればよいか曖昧である。アンケート結果からも自分の班は知っているが、仕事内容については

把握しきれていないということが分かった。また、実際の避難訓練では、担任するクラスの子どもたちの誘導と安全確保が優先となるため、災害発生直後は、編成隊の担当通りに動くことができず、実際には活用されていないと感じられた。そのため、編成表の見直しが必要であり、編成隊として動くには全園児の避難、安全確認ができた後に編成表に則って各々が各班の仕事につき、効率よく動くことができるような一覧表を作成することにした。

#### 改善点

- ・現行の自衛消防編成表に、非常食一覧、各班の仕事チェックリスト、関係機関の連絡先を追加する。
- ・消防編成を見直し、新しい班を追加、常勤職員全員の担当を決める。  
(別表1)(別表2)

#### Ⅶ 考察

避難訓練のアンケートやシミュレーションに基づいたアンケートを行ったことで、これまで、どこか漠然とした捉え方であったが、災害時の仕事を具体的に考える機会ができ、自分ごととして捉えるようになり、疑問や不安が明確になった。そうすることで次のステップへ進めたと考えられる。

職員間の意見交換会では、普段話す機会の少ない職員同士で話をしたり、先輩後輩関係なく意見を出し合ったりすることができた。疑問や不安も共有することができ一体感が生まれ、職員間の信頼関係を一層構築することができたと考えられる。緊急時に声を掛け合うことの重要性も実感でき、意思の疎通を図りやすくなり、迅速な対応につながるのではと感じた。

また、自衛消防隊の再編成により、自分の仕事が明確になった。チェックリストができたことで、だれがどの仕事を行ったかが分かり、責任

をもって行うようになっていく。各班の仕事内容の把握ができるようになったことで、協力体制が取りやすくなり、共通認識のうえでの臨機応変な対応が期待される。

#### Ⅷ まとめと今後の課題

乳幼児を預かる施設において、避難訓練は単なる慣例的な行事ではなく、大切な子どもたちをはじめ、職員を含めた全員の命を守りぬくためにあるものである。

子どもたちの心身の健康を守り、安全、安心を確保するために、災害への対策を強化していかなければならない。その為には、職員が防災に関する正しい知識を備え、防災に対して積極的に取り組むことが必要である。また、子どもたちへは、避難訓練や「防災ってなあに？」の取り組みを通し、日頃から防災への意識を高めていくことで、「自分の命は自分で守るもの」という意識が育つようにしていきたい。

毎月の避難訓練では、地震や水害も含めた災害を考え、災害後に火災が起こった想定で訓練を行っている。日頃から災害時の自分の仕事は何か、職員間の連携、協力体制などを意識しておくことで、有事の際に、組織全体が迅速かつ的確な対応ができると考えられる。

今後は避難訓練のプラスワン訓練として、自衛消防組織の実働訓練を定期的に行いながら、知識と技術の取得、連携強化、防災意識の向上に努めていきたい。

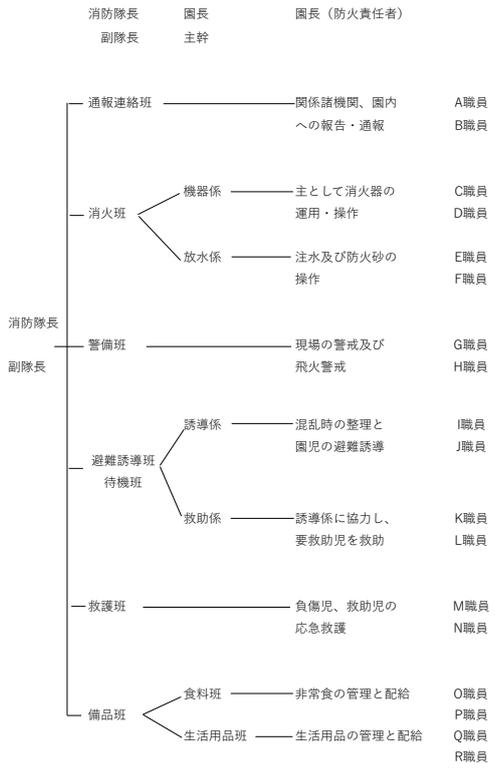
参考文献

- 1) 気象庁:地震と津波-その監視と防災情報-, p.1, 2024.
- 2) 岡本和花、白紙敬介:就学前施設における保育者の防災教育意識の実態, 上越教育大学研究紀要第 39 巻第 2 号 P1, 2020
- ・経済産業省「想定外から子どもを守る 保育施設のための防災ハンドブック」

2024年度 自衛消防隊編成表	いこまこども園	火元責任者配置表	避難誘導訓練予定表																																																																																																			
<p>消防隊長 園長 園長 (防火責任者)</p> <p>副隊長 主幹</p> <p>通報連絡班 関係諸機関、園内への報告・通報 A職員</p> <p>消火班 主として消火器の運用・操作 B職員</p> <p style="margin-left: 20px;">機器係</p> <p style="margin-left: 20px;">放水係 注水及び防火砂の操作 C職員</p> <p>消防隊長 警備班 現場の警戒及び飛火警戒 A職員</p> <p>副隊長</p> <p>避難誘導班 混乱時の整理と園児の避難誘導 保育教諭 18名 D職員</p> <p style="margin-left: 20px;">誘導係</p> <p style="margin-left: 20px;">救助係 誘導係に協力し、要救助児を救助 E職員</p> <p>救護班 負傷児、救助児の応急救護 F職員</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">防火管理者</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">火元責任者</th> </tr> <tr> <th style="text-align: center;">氏名</th> <th style="text-align: center;">場所</th> <th style="text-align: center;">責任者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="14" style="text-align: center; vertical-align: middle;">園長</td> <td style="text-align: center;">りす組保育室</td> <td style="text-align: center;">G職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">きりん組保育室</td> <td style="text-align: center;">H職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">赤1組 保育室</td> <td style="text-align: center;">C職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">赤2組 保育室</td> <td style="text-align: center;">I職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">黄1組 保育室</td> <td style="text-align: center;">E職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">黄2組 保育室</td> <td style="text-align: center;">J職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">青1組 保育室</td> <td style="text-align: center;">B職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">青2組 保育室</td> <td style="text-align: center;">K職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">いちごルーム</td> <td style="text-align: center;">F職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">多目的室・職員休憩室</td> <td style="text-align: center;">F職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">事務室・ホール</td> <td style="text-align: center;">F職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">給食室</td> <td style="text-align: center;">栄養士</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">陶芸室・園庭</td> <td style="text-align: center;">A職員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1階昇降口・屋上</td> <td style="text-align: center;">A職員</td> </tr> </tbody> </table>	防火管理者	火元責任者		氏名	場所	責任者	園長	りす組保育室	G職員	きりん組保育室	H職員	赤1組 保育室	C職員	赤2組 保育室	I職員	黄1組 保育室	E職員	黄2組 保育室	J職員	青1組 保育室	B職員	青2組 保育室	K職員	いちごルーム	F職員	多目的室・職員休憩室	F職員	事務室・ホール	F職員	給食室	栄養士	陶芸室・園庭	A職員	1階昇降口・屋上	A職員	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">月</th> <th style="text-align: center;">日</th> <th style="text-align: center;">曜日</th> <th style="text-align: center;">想定 (出場所等)</th> <th style="text-align: center;">備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="text-align: center;">26</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">地震</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">5</td> <td style="text-align: center;">17</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">西隣接「幸楽」</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">6</td> <td style="text-align: center;">21</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">避難経路の確認 消防署の指導による防火</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">7</td> <td style="text-align: center;">12</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">給食室</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">23</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">地震</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">9</td> <td style="text-align: center;">20</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">水害</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">10</td> <td style="text-align: center;">25</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">焼き物室</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">11</td> <td style="text-align: center;">29</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">いちごルーム</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">12</td> <td style="text-align: center;">13</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">事務室</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1</td> <td style="text-align: center;">24</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">地震</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2</td> <td style="text-align: center;">14</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">りす組</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">3</td> <td style="text-align: center;">14</td> <td style="text-align: center;">金</td> <td style="text-align: center;">給食室</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	月	日	曜日	想定 (出場所等)	備考	4	26	金	地震		5	17	金	西隣接「幸楽」		6	21	金	避難経路の確認 消防署の指導による防火		7	12	金	給食室		8	23	金	地震		9	20	金	水害		10	25	金	焼き物室		11	29	金	いちごルーム		12	13	金	事務室		1	24	金	地震		2	14	金	りす組		3	14	金	給食室	
防火管理者	火元責任者																																																																																																					
氏名	場所	責任者																																																																																																				
園長	りす組保育室	G職員																																																																																																				
	きりん組保育室	H職員																																																																																																				
	赤1組 保育室	C職員																																																																																																				
	赤2組 保育室	I職員																																																																																																				
	黄1組 保育室	E職員																																																																																																				
	黄2組 保育室	J職員																																																																																																				
	青1組 保育室	B職員																																																																																																				
	青2組 保育室	K職員																																																																																																				
	いちごルーム	F職員																																																																																																				
	多目的室・職員休憩室	F職員																																																																																																				
	事務室・ホール	F職員																																																																																																				
	給食室	栄養士																																																																																																				
	陶芸室・園庭	A職員																																																																																																				
	1階昇降口・屋上	A職員																																																																																																				
月	日	曜日	想定 (出場所等)	備考																																																																																																		
4	26	金	地震																																																																																																			
5	17	金	西隣接「幸楽」																																																																																																			
6	21	金	避難経路の確認 消防署の指導による防火																																																																																																			
7	12	金	給食室																																																																																																			
8	23	金	地震																																																																																																			
9	20	金	水害																																																																																																			
10	25	金	焼き物室																																																																																																			
11	29	金	いちごルーム																																																																																																			
12	13	金	事務室																																																																																																			
1	24	金	地震																																																																																																			
2	14	金	りす組																																																																																																			
3	14	金	給食室																																																																																																			

別表1 【2024年度 自衛消防隊編成表 4月作成】

2024年度 自衛消防隊編成表 いこまこども園



火元責任者配置表

防火管理者 氏名	火元責任者	
	場所	責任者
園長	りす組保育室	O職員
	きりん組保育室	P職員
	赤1組 保育室	E職員
	赤2組 保育室	Q職員
	黄1組 保育室	G職員
	黄2組 保育室	R職員
	青1組 保育室	C職員
	青2組 保育室	H職員
	いちごルーム	S職員
	多目的室	S職員
	職員休憩室	S職員
	事務室	S職員
	ホール	栄養士
	給食室	栄養士
陶芸室	A職員	
園庭		
1階昇降口	A職員	
屋上		

消火器設置場所

番号	場所
1	いちごルーム
2	なんでも室
3	焼き物室
4	玄関ホール
5	ホール奥（絵本コーナー側）
6	給食室（事務所側）
7	事務室
8	給食室（幸楽側）
9	幼児トイレ横
10	幼児トイレ前
11	幼児廊下東
12	りす組（玄関側）
13	りす組（トイレ側）
14	キュービクル（芋畑）

関係機関連絡先

場所	電話番号
生駒市役所（こども課）	74-1111（内線772）
生駒市消防署本部	73-0119
水道局本局	79-2800
生駒警察署	74-0110（緊急時は110）
災害伝言ダイヤル	171（局番なし）
法人本部	0743-74-1172
いこまこども園	〒630-0245 生駒市北新町2-11 ☎0743-73-2474

避難誘導訓練予定表

月	日	曜日	想定（出火場所等）	備考
4	26	金	地震	
5	17	金	西隣接「幸楽」	
6	21	金	避難経路の確認指導による防火消火、避難訓練	
7	12	金	給食室	
8	23	金	地震	
9	20	金	水害	
10	25	金	焼き物室	
11	29	金	いちごルーム	
12	13	金	事務室	
1	24	金	地震	
2	14	金	りす組	
3	14	金	給食室	

チェックリスト

通報連絡班

<input type="checkbox"/>	消防に連絡を入れる
<input type="checkbox"/>	緊急連絡カード
<input type="checkbox"/>	保護者に連絡を入れる
<input type="checkbox"/>	災害伝言ダイヤルを使用

消火班

<input type="checkbox"/>	消火の必要な場所を確認
<input type="checkbox"/>	燃えやすそうな物の移動
<input type="checkbox"/>	初期消火（近くの消火器を使用）

警備班

<input type="checkbox"/>	現場の警戒
<input type="checkbox"/>	飛火警戒
<input type="checkbox"/>	電気ブレーカーを落とす
<input type="checkbox"/>	ガスの元栓閉める

避難誘導班（救助係）

<input type="checkbox"/>	逃げ遅れた子どもの確認
--------------------------	-------------

避難誘導班（誘導係）

<input type="checkbox"/>	安全な避難経路の確保
<input type="checkbox"/>	園児の安全確保
<input type="checkbox"/>	人数確認・報告（園長へ）
<input type="checkbox"/>	体調、けがの確認
<input type="checkbox"/>	他クラスの避難応援
<input type="checkbox"/>	クラスの状況報告（園長へ）
<input type="checkbox"/>	→逃げ遅れ、けがなど

待機班

<input type="checkbox"/>	お迎えを待つ時の待機場所の確保
<input type="checkbox"/>	待機場所での子どもの見守り
<input type="checkbox"/>	保護者へ受け渡し時のチェック

救護班

<input type="checkbox"/>	救急セットの用意
<input type="checkbox"/>	怪我をした子どもの手当
<input type="checkbox"/>	119番通報

必需品班（食料係）

<input type="checkbox"/>	非常食の確保（ミルク含む）
<input type="checkbox"/>	アレルギーの確認
<input type="checkbox"/>	配給

必需品班（生活用品係）

<input type="checkbox"/>	生活用品の確保 （オムツ・着替え・タオル・ 除菌シート・防寒具・布団・ 懐中電灯・ラジオ・非常用トイレ）
<input type="checkbox"/>	生活用水

いこまこども園 非常食一覧

2024/4/1 現在

食品	個数	期限	保管場所					
			玄関倉庫	2F倉庫	保育教材室	りす組	裏倉庫	
長期保存パン(チョコ)	50食×1箱	50個	2031/3		1箱			
長期保存パン(ミルク)	50食×1箱	50個	2031/3			1箱		
紙コップパン ストロベリー	24個入×2箱	48個	2026/8/22			1箱	1箱	
紙コップパン パター	24個入×2箱	48個	2026/8/22	1箱	1箱			
水 500ml	24本入×9箱	216本	2029/1/3	3箱	2箱	2箱	1箱	2箱
おにぎり(わかめ)	50個×4箱	200個	2029/8			4箱		

別表2【2024年度 自衛消防隊編成表 11月作成】

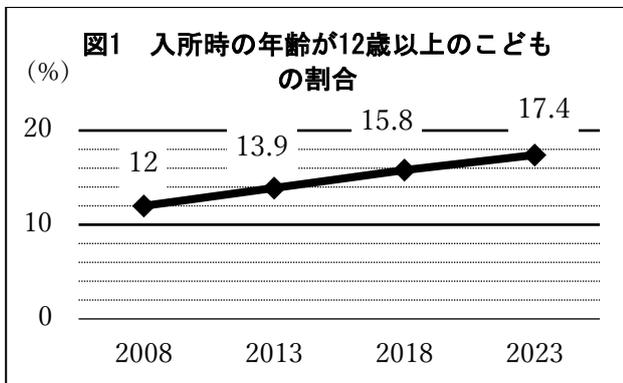
# こどもとともに生き立ちに向き合うⅢ

## ～ライフストーリーワークに取り組んだ10年～

松本冨加（児童養護施設 愛染寮）

### I. はじめに

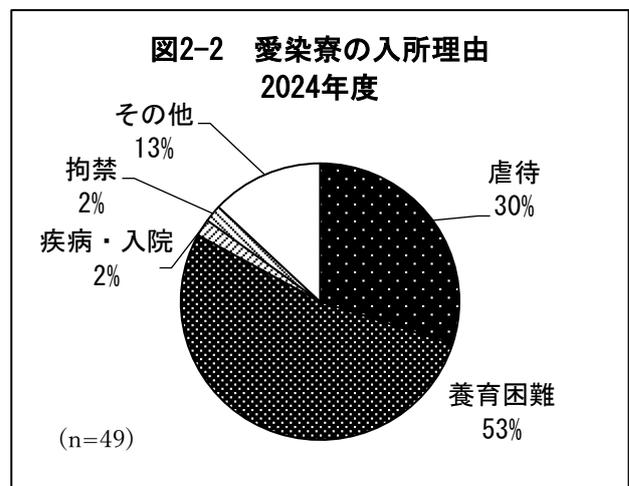
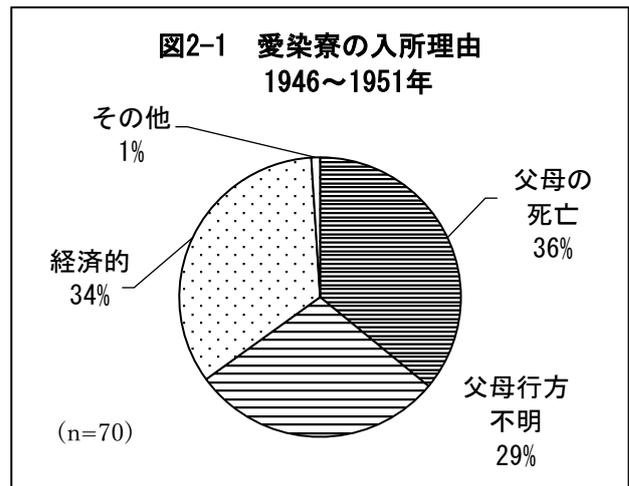
近年、児童養護施設では、高齢児になってからの入所（図1）や、虐待を理由とする入所が増えている（図2-1,2-2）。また、親の生活状況が複雑化していることが多く、その複雑さからこども自身も入所理由を間違えて認識をしていたり、自分や親の生き立ちについて知らなかったりすることも多い。愛染寮においても同様の傾向が生じ、そのこどもたちへの対応に難しさを感じる職員が多くなったように見受けられた。



（旧厚生労働省子ども家庭局

「児童養護施設入所児童等調査の概要」）

さらに、日本が1994年に批准した「こどもの権利条約」の中で、こどもが出自を知る権利の保障が明記され、また児童養護施設運営指針に、こどもが未来に向かうた



めには、過去を受け入れ自分の物語を形成することの重要性が記載され、こどもの発達に応じ、自身の出生・生き立ち・家族状況について可能な限り事実を伝えるようにとの内容が制定された<sup>1</sup>。

こういった点も踏まえ、愛染寮では10年前から、子どもとともに生き立ちを整理するライフストーリーワーク（以下「LSW」と言う。）の取り組みを始めた。

## II. LSW とは？

LSW は元々イギリスでライフストーリーワークブックとして出版されていた。そこに、当時、生殖補助医療によって生まれた子どもの研究を重ねていた才村眞理氏<sup>2</sup>が、その有用性に着目し、日本に導入するために大阪で研究会を立ち上げ、ライフストーリーブックの日本版を作成した<sup>(1)</sup>。愛染寮では、この日本版を参照に実施している。

LSW とは簡潔に言えば、子どもの生き立ちの整理である。LSW の特徴として、大人が一方的に伝える真実告知とは違い、子どもとともに、様々なワーク（図3）<sup>(2)</sup>や写真の整理等を通してゆっくりと現在の自分や、過去の自分を振り返りながら、未来へと繋いでいく取り組みである点が挙げられる（図4）。



図3 子どもとのワーク例「わたしが好きなこと！」

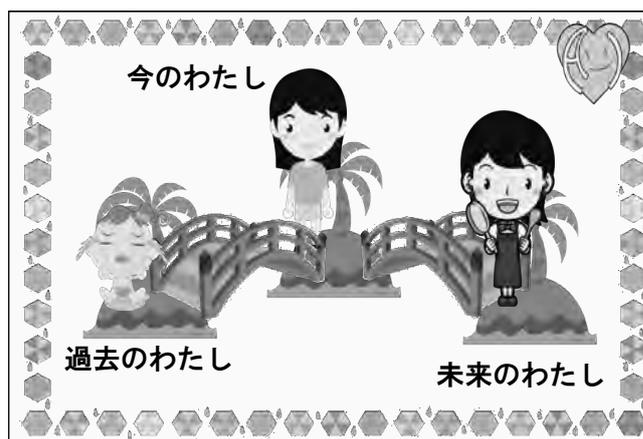


図4 LSW イメージ図（施設内研修資料より）

## III. 愛染寮における LSW の経過

### (1) LSW の取り組みの経過

2014年、才村眞理氏をスーパーバイザーとして、奈良県ライフストーリーワーク研究会が立ち上がり、愛染寮も参加した。そして、2015年から実際に子どもへのLSWの実施を始めた。その後、実施者や臨床心理士を含めてLSW委員会を立ち上げ、バックアップ体制や研修体制も整えた。

### (2) 過去の実績

実施期間は、2015年～現在まで。実施人数は、年間1～2人実施し、のべ18人である。

内訳) 高校生…5人  
中学生…2人  
小学生…8人  
幼児…3人

### (3) 実施する子どもの選定方法

毎年、大人から実施のニーズがあるかどうか調査をするため、LSW委員会より、ホーム別で実施検討用紙を記入してもらう。また、子どもからのニーズも知るため

<sup>1</sup> 児童養護施設運営指針、第II部4.(1)③「子どもの発達に応じて、子ども自身の出生や生き立ち、家族の状況について、子どもに適切に知らせる。」

<sup>2</sup> 元帝塚山大学教授、ライフストーリー相談室主宰

に、こどもと一緒に作成する自立支援計画書の中で「自身の入所理由を知っているか」の質問項目を設定し、知らない場合はそこで入所理由を知りたいかどうか聞き、こどもからニーズがあるか調査する。

大人とこどもの両方からのニーズ調査を基に、LSW 委員会でその年度に実施するこどもの選定を行う。

#### IV. 経過

愛染寮では、これまで LSW についてのポスターを 2 回発表した。第 20 回法人研究ポスター発表では、2 年間 LSW に取り組んで、職員の意識やこどもとの関わりに変化があったのかを明らかにする目的でアンケートとインタビューを行った。その結果、LSW という一つのプログラムを取り入れたことにより、職員の日常の関わり方や新しい取り組みに広がりがあったことが分かった。

第 26 回法人研究ポスター発表では、8 年の間に LSW を実施したこどもに自由記述アンケートとインタビューを行った。その結果、LSW を実施したこどもは、全員がやって良かったと回答し、こどもの存在感や人生をこどもも職員もともに肯定し、よりよく生きる力を育てる関わりの一つになっているということが分かった。

#### V. 本研究の目的

IV. で示した 2 回のポスター発表の調査結果を踏まえて、こどもと直接関わる職員とこどもを対象に、アンケート及びインタビューを通して、現在の愛染寮における LSW の意識と今後の課題について明らかにすることを目的とする。

#### VI. 研究 1 職員の意識アンケート

##### (1) 対象

こどもと直接関わる職員 29 人

##### (2) 方法

Google フォーム入力式による選択及び記述アンケートの実施 (2024 年 9 月～10 月) (表 1)。

表 1 質問項目

質問項目
Q1.勤続年数
Q2.職種
Q3.今までに LSW を学んだことがありますか? (選択)
Q4.今までに LSW の実施者や付添人をしたことがありますか? (選択)
Q5.あなたは LSW についてどれくらい知っていますか? (選択)
Q6.愛染寮でこどもたちに LSW を実施する必要性があると思いますか? (選択)
Q7-1.あなたは今後実施者としてこどもに LSW を実施したいと思いますか? (選択)
Q7-2.その理由を教えてください。(記述)
Q8-1.LSW の実施者以外の方法で積極的に関わりたいと思いますか? (選択)
Q8-2.その選択についてもう少し教えてください。(記述)
Q9-1.日常業務やこどもとの関わりの中で、LSW を意識していることはありますか?
Q9-2.その理由を教えてください。(記述)
Q10.LSW を一言でいうと?! (記述)
Q11.今後も LSW を実施するにあたって課題はなんだと思いますか? (記述)
Q12-1.LSW を実施した子について、実施する前と後とで変化は感じましたか? (選択)
Q12-2.「変化あり」を選択した人はどんな変化を感じたか書いてください。(記述)
Q13.LSW を実施した、またはしている子について、実施期間中に気になったり印象に残ったりしていることはありますか? (記述)

### (3) 結果

#### 1) 実施者・付添人の経験について

「今まで LSW の実施者や付添人をしたことがありますか？」という質問に対して、実施者の経験者は 3 人。付添人または、単回ゲストの経験者は、11 人（実施者と重複あり）であった。実施者について、8 年前は 2 人であった。8 年経っても実施者は 1 人しか増えず、実施者の数が少ないのが現状である。

#### 2) LSW の周知度について

「あなたは、LSW についてどのくらい知っていますか？」という質問に対して「とてもよく知っている」「どちらかと言えば知っている」と答えた人が、約 93%。

「どちらかと言えば知らない」と答えた人が約 7%であった。8 年前は、「知っている」と答えた人は、約 48%であった。この間、施設内では、新任研修の一部にも取り入れてもらい、年に 1~2 回の職員研修のテーマとしても取り上げ、さらに施設外の基礎研修（県事業）にも積極的に職員の参加を促してきた。これらの取り組みによって、周知されるに至ったと思われる。

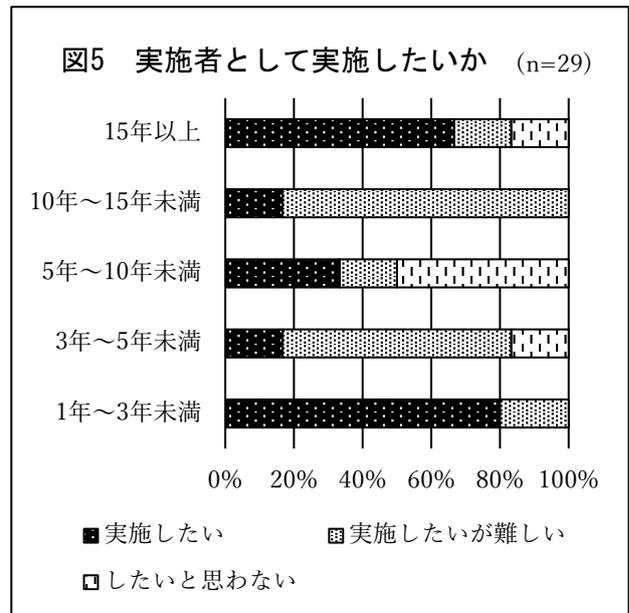
#### 3) こどもたちへの LSW の必要性について

「愛染寮でこどもたちに LSW をする必要性があると思われませんか？」という質問に対して「とても必要である」が約 93.3%

「どちらかという必要である」が約 6.7%であった。8 年前は、「とても必要」が約 87%、「どちらかといえば必要である」が約 13%であった。以前からこどもたちへの LSW の必要性は、全職員が感じていたことがわかる。

#### 4) 実施者について

図 5 にあるように、1 年~3 年未満および 15 年以上の職員は、実施者として「実施したい」という人が多い。一方で 3 年



~15 年未満の職員は、「実施したいが、難しい」「したいと思わない」と答えた人が大部分を占める。

実施者をした理由としては、こどもに必要なことである、あるいは、こどもをより理解したいということが挙げられている。一方で難しい理由としては、知識不足・経験不足・勤務の問題が挙げられている。確かに LSW は必要性は高いが、実施にあたって、こどものニーズや心理的状況を鑑みながら実施する必要がある。つまり、誰でもやればよいという訳ではないことも、研修ごとに伝えてきたことである。そして 3 年を超えてくると、責任も多くなり、業務の幅も広がり、負担が大きくなり余裕がなくなることも要因と考えられる。

#### 5) LSW に積極的に関わりたいか

「LSW の実施者以外の方法で積極的に関わりたいと思いますか？」という質問に対して「関わりたい」「無理ない範囲で関わりたい」と答えた人が約 97%、「関わりたいくない」と答えた人が約 3%であった。

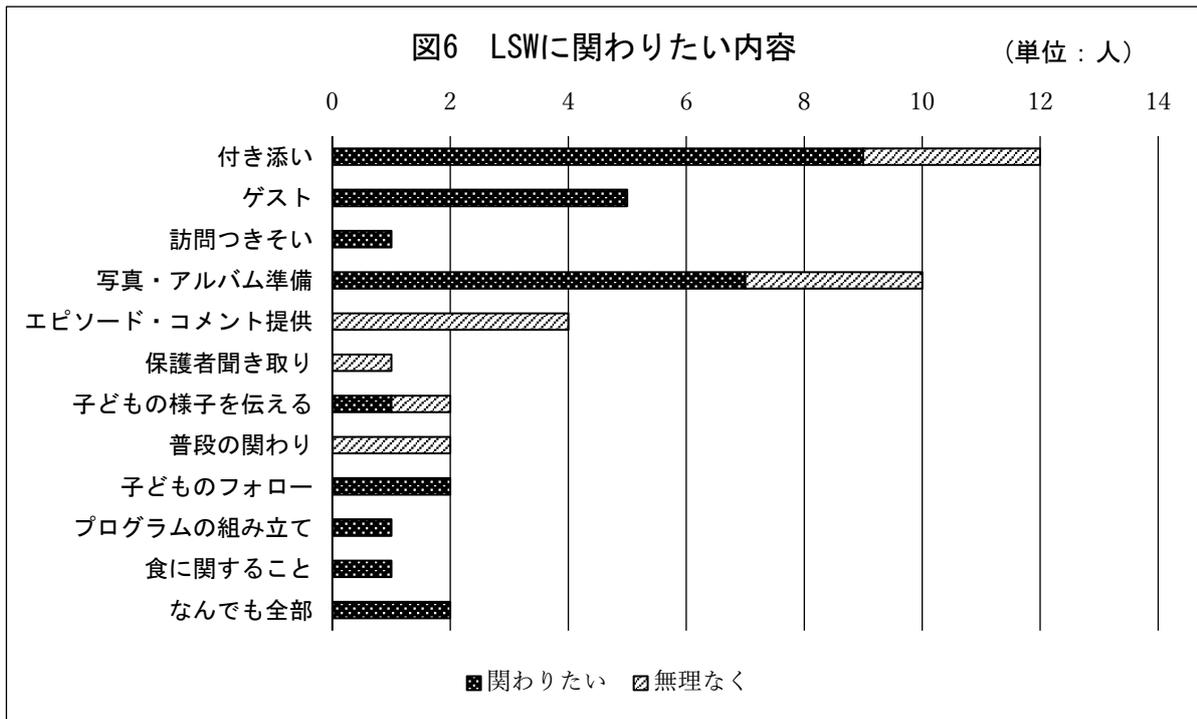


図6にあるように、「付き添い・ゲスト・訪問付き添いをしたい」という答えは、こどもとともに取り組みたいという思いの表れであると考えられる。また、「こどもの様子を伝える・普段の関わり・こどものフォローをしたい」という答えは、日常場面で支えたいということである。それは、LSWに取り組むことは、決して楽しいことばかりでなく、こどもの負担や動揺になることが十分にあり、日常生活に影響することもあるという重要な点が職員全体に周知され、そこへのフォローも必要だと認識されている表れだと考えられる。

#### 6) 日常で LSW を意識しているか

「日常業務やこどもとの関りの中で、LSW を意識していることはありますか?」という質問に対して全員が「意識している」と答えた。8年前は、日常的に意識している職員は、約53%であった。

意識している内容としては、「話し

やすい雰囲気づくり」や「こどもから話が あればきちんと聞く」「誕生日を意識して 祝う」「記録を残す」などが挙げられた。特に、していることは無いと答えた人でも、これらのことはしていると答えた。

#### 7) 実施前後でこどもの変化はあったか

図7にあるように、約69%の人が、「変化があった」と感じていた。どんな変化があったかは、表2に示す。

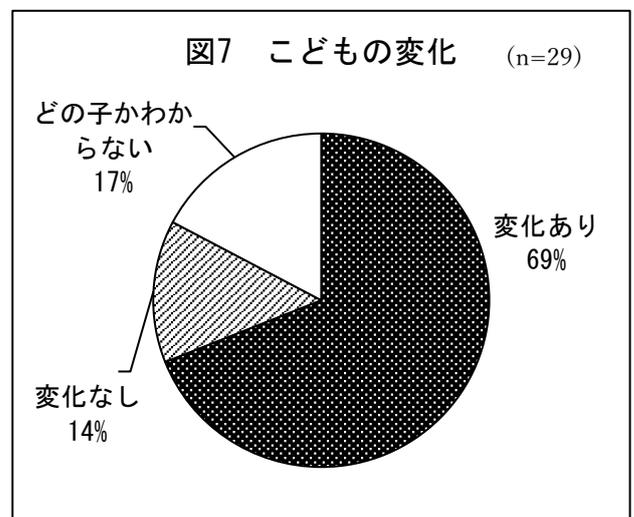


表2 どのような変化があったか

(単位：人)

家族の話ができるようになった	6
親のことを割り切れるようになった	4
将来の話が増えた	2
自分を応援する存在を知った	1
家族に気を遣う(経済的に)	1
自分の意見を発言するようになった	1
自分のことを気にするようになった	1
他の子たちもLSWの存在を知る	1
表情が明るくなった	1
振り返りができて子どもも大人も満足	1

この変化のうち、「家族の話をするようになった」「自分の意見を言えるようになった」「表情が明るくなった」などは、自信を持てるようになったと思われる。また、「親のことを割り切れるようになった」「家族に気を遣うようになった」などは、子どもが親と適切な距離を取れるようになったと考えられる。「将来の話が出来るようになった」ということも、今の自分に自信を持てるようになったからと思われる。

#### (4) 考察

子どもへのLSW必要性については、全職員が必要と感じている。ただ、実施者として実施したいかという点、日常業務の負担や責任感との兼ね合いで難しい部分がある事が分かった。それが、この8年間実施者が2人から3人へ、1人しか増えなかった要因であるかもしれない。ただ、実施者に限らない関わり方は、広がってきており、写真やエピソードの準備、保護者からの情報収集が出来るようになる職員は多くいる。あるいは、普段のこどもの様子を伝えるなど、日常的なフォローをしたいと考える職員もいる。そして何よりもLSWをしている子どもに寄り添いたいと思う職員が

多くいる。このように、様々な形で多くの職員がLSWを実施している子どもを支えようとする意識が広がっていることが分かった。

また、日常生活上でLSWを意識している職員は、8年前は、約53%であったが、現在は全職員が意識していると答えた。これは、8年間の取り組みの成果だと思われる。その具体的な内容としては、話しやすい雰囲気づくりや誕生日を祝うこと、記録を残すことなどであった。ただ、特にしていないと答えた職員もこれらのことをしていると答えていた。これらのこともLSWの一部であるという意識づくりは、今後の課題である。

LSWを実施したこどもの変化については、約69%の職員が変化を感じた。その変化の内容については、家族の話が出来るようになる、自分の意見を言えるようになるなど、自信を持てるようになったと考えられる変化である。また、将来の話が出来るようになったことも、自信を持ったからであると思われる。また、親のことを割り切れるようになる、家族に気を使えるようになるのも、子どもが親と適切な距離を取れるようになったと思われる。つまり、LSWの経験を通し、自分に自信を持てるようになり、家族や周囲と適切に付き合えるようになる可能性があることが分かった。

## Ⅶ. 研究2 実施した子どもへのインタビュー

### (1) 対象

退所した子どもも含め、今まで実施した子ども12人(家庭引き取りなどで、インタビューできない子どももいるため、実際の実施人数とは異なる。)

内訳) 小学生…3人/中学生…5人/社会人…4人

## (2) 方法

対面または電話でのこどもへの個別インタビュー

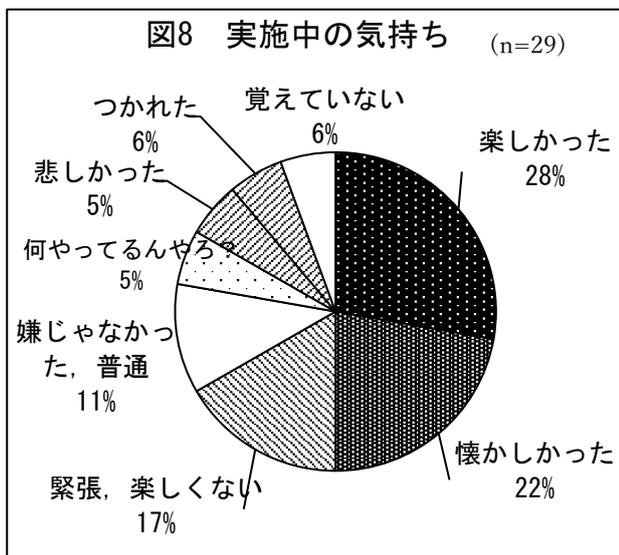
## (3) 結果

### 1) LSWの説明時について

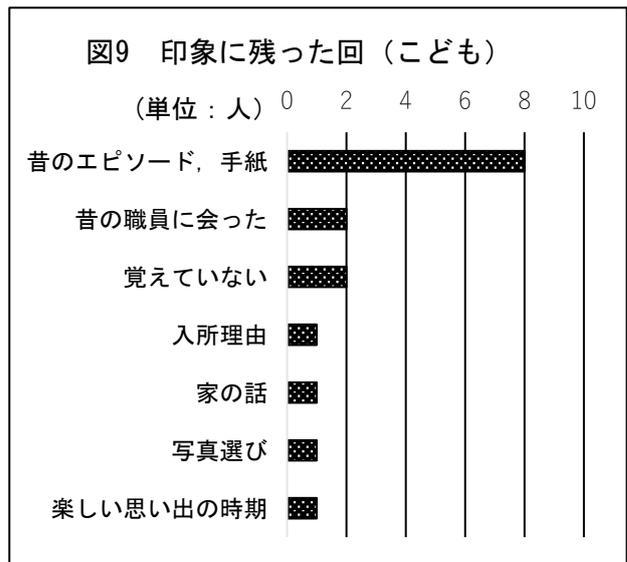
「LSWについて説明され、実施すると聞いたとき、どう思いましたか?」という質問に対して、「なにそれ?」「覚えていない」という答えが、約60%であった。また、「面倒くさい」「不安」という答えは、約29%であった。「楽しみ」と答えた子は、約8%いた。

### 2) LSW実施中の気持ち

「LSWをやっているとき、どんな気持ちでしたか?」という質問に対して、「楽しかった」「懐かしかった」が約50%であった。残り半数には、「緊張した」や「何やってるんやろ?」という疑問、「悲しい」「疲れた」などの様々な気持ちが出た。(図8)



### 3) 印象に残った回



「LSWを実施する中で、一番印象に残った回はどの回ですか?」という質問に対しては、「担当職員から、昔のエピソードや手紙をもらったのが印象に残った」という答えが最も多かった。(図9)

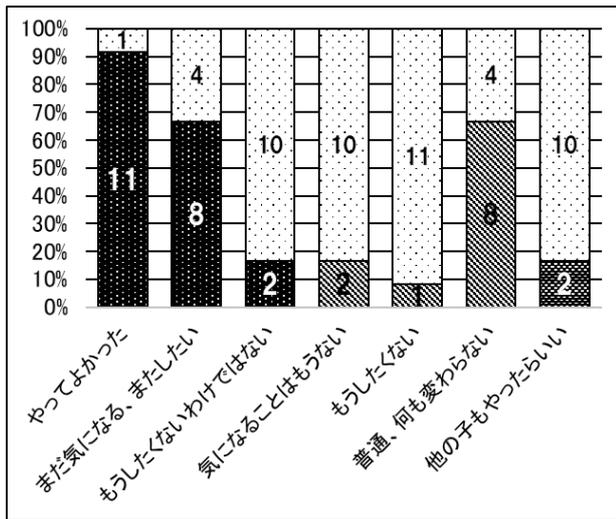
### 4) LSWをやり終えた時の気持ち

「ただ単に終わった」と思ったこどもが約42%。「やっと終わった」と思ったこどもが約33%いた。

### 5) LSWを振り返って

「やって良かった」と答えたこどもが約92%。「まだ気になる」「またしたい」など答えたこどもは約67%。「もうしたくない」というこどもも約17%いた。また、他の子もやったらいいというこどもも約17%いた。(図10)

図 10 振り返って



#### (4) 考察

以上の結果からは、LSW を始める前は、何のことも分からないという子や、不安を感じるという子が多い。ところが、実際に始めて見ると、楽しさや懐かしさを、大部分の子が感じている。しかし、楽しいだけでなく、緊張や疑問や悲しさなど同時に感じていることも考えられた。また、印象に残った回としては、昔のエピソードを知った回が最も印象に残ったと答えたこどもが一番多かった。こどもにとって入所は家庭から切り離されるという傷つき体験だと考えがちな職員にとって予想外であった。しかし、当時を直接知る人から、その時の様子を聞くことで、自分自身が生きている証を知ることが出来るこども達にとって何よりもうれしい体験であるということが改めてわかる。

そして、終了を迎えた時には、大きな感情の変化はなく、ただ終わった、やっと終わったと感じる子が大多数であった。そこからは、LSW がただ単に楽しいや懐かしい思い出を振り返るだけのものではなく、一つの人生をもう一度体験しなおすという程の大きな出来事になっている可能性が考えられる。

また、やって良かったというこどもが約 92%いたという結果は、こどもたちにとって、自分の人生を知ることが、どれほど大切なことだということか改めてわかる。

さらに、他の子もやったらいいと答えた子が、約 17%いたが、退所後数年経った子たちである。ある子は、寂しくなった時に LSW ブックを見て支えにし、また、ある子は、社会に出てからでは、自分の過去を知ることが出来ないということに気づき、施設にいる間にしかできないからこそやるべきと考えた様であった。やはり、LSW は施設にいる間にすることが、非常に大切だということが考えられる。

### VIII. 研究 3 こども達のニーズ調査

#### (1) 対象

幼児…9人

小学生…20人

中学生・高校生…10人

#### (2) 方法

絵本「しりたいな しりたいな」(大阪ライフストーリーワーク研究会)を読み聞かせ後、インタビューを実施

※小学生・中学生・高学生は、3~7人ずつのグループで実施。幼児は、1人または2人ずつで実施した。

#### 質問項目

①今まで自分のルーツについて知りたいと思ったことはあったか?

②主人公のように自分のルーツを知りたいと思うか? または、LSW をしてみたいか?

### (3) 結果

#### 1) 質問①について

知りたいと思っ たことがある	回答例
幼児 4人	・ある
小学生 6人	・おうちどこかなって思った ・ママはどこへ行ったのか ・なんでここ（施設）にいるんや ろ？
中高生 2人	・知りたいと思ったことはあった ・何でここにいてるんやろ？

#### 2) 質問②について

知りたい・LSW をしてみたい	回答例
幼児 7人	・赤ちゃんの時の写真見たい ・聞いてみたい ・やったことないから1回してみ たい。
小学生 10人	・未来のことをやってみたい ・過去と未来やってみたい ・知りたい
中高生 2人	・幼稚園を知りたい ・知りたいと思う ・またやってみたい

#### 3) 自分のルーツや LSW へのニーズにつ いて

「知りたいと思っただことがある」または  
「絵本を読んで知りたいと思っただ」  
…約 49%

「知りたいと思わない」…約 41%

### (4) 考察

結果 3) に示すように、約 49% のこども  
が、どこかで知りたいと思っただいたり、絵  
本をきっかけに知りたいと思っただようになっ  
たりしていることが分かった。一方で知り  
たくないとの回答をしたこどもが約 41%  
もいた。これについては、現在の施設生活  
での安定感に乏しかったり、家庭状況がま  
さに変動している最中であっただりする子  
が多いように見受けられる。つまり、こども  
が知りたいと思っただためには、安心できる生

活環境が必要と思われる。やはり、安心で  
きる環境づくりがいかに重要かを改めて感  
じた。

## Ⅹ. 総合考察

### (1) 研究 1: 職員の意識アンケートより

こどもへの LSW の必要性については、  
全職員が必要と感じていることが明らか  
になった。ただ、実施者として実施する場  
合は、日常業務や責任感の兼ね合いで難  
しい部分があることもわかった。そして、  
実施者に限らず、LSW に対して様々  
な形での協力や実施しているこどもに  
寄り添いたいと思っただ職員が多いこと  
もわかった。また、日常生活上の LSW  
について、意識をしている職員は、8  
年前は 53% であっただが、現在は、  
全職員となっている。これは、「日々  
の関わりとライフストーリーワーク  
～施設職員活用ツール～」(3) などを  
用いて研修を行うなどした、8 年間の  
取り組みの成果だと思われる。

LSW を実施したこどもについては、  
約 67% の職員が変化を感じている。  
その変化とは、家族の話や自分の意  
見を言えるようになったり、親のこ  
とを割り切れるようになったりした  
ことが挙げられている。つまり、LSW  
の経験を通し、自分に自信を持てる  
ようになり、家族や周囲と適切に付  
き合えるようになることが分かった。

### (2) 研究 2: 実施したこどもへのアンケートより

LSW について、はじめはわからな  
かったが、実際に始めてみると、  
楽しさや懐かしさを感じる子が大部  
分になることと同時に、緊張や疑問、  
悲しさも感じていることもわかった。

また、印象に残った回としては、  
予想とは違い、昔のエピソードを知  
った回が最も

印象に残ったという結果になった。子どもたちにとって、当時を直接知る人からその当時の様子を聞くことは、自分自身が生きている証を知ることになり、何よりもうれしい体験であるということが考えられた。

そして、終了を迎えたときに大きな感情の変化はなく、ただ終わった、やっと終わったと感じている子が大多数で、これは LSW が一つの人生をもう一度体験しなおすという程の大きな出来事になっている可能性が考えられた。

最後にやってよかったという子どもが約 92% という結果は、自分の人生を知ることの大切さが、改めてわかり LSW は施設にいる間にすることが非常に大切だということが考えられる。

### (3) 研究 3：子どもたちのニーズ調査

約 49% の子が、自分のルーツについてどこかで知りたいと思っていることが分かった。一方で知りたくないという子どもも、予想以上に多かったことから、子どもが知りたいと思うためには、安心できる環境が必要と思われる。やはり、安心できる環境づくりが重要だと改めて感じた。

## X. まとめと今後の課題

愛染寮では、2015 年より LSW の実施を始め、その後、施設内で委員会を立ち上げ、施設内で普及させる取り組みをしてきた。今回の調査を通じて、委員会の活動が実になってきていることを感じると同時に、課題も見えてきた。

研究 1「職員の意識調査」からは、全職員が LSW の必要性を感じるようになった一方で、実施者が増えない現状であることが改めて浮き彫りになった。職員アンケートの中で、今後の課題はなにか？という質問でも、多くの人が、実施者の少なさを挙

げていた。必要性は感じているが、実施者が少ないことで、LSW をしてあげたいが、してあげられないという現状である。今後、実施者を増やしていくには、どのような工夫が必要なのか、今回見えてきた課題をもとに考えていきたい。

また、日常生活上で LSW を意識している職員が全職員になったことは、大きな成果である。一方で特に意識していないと答えた職員の中にも、実際にしていることは、LSW 的であることが多々あった。つまり、自分でしていることが LSW に繋がることだと気づいていないわけである。日ごろの何気ない関わりの中でも LSW の関わりができる、という意識づくりをさらに進めるためにどうするのが、今後の課題であると感じた。

研究 2「実施した子どもへのインタビュー」からは、子どもたちが、一番印象に残っているという回が、思い出を振り返る回であったことは、その体験がアイデンティティの形成になり、何よりもうれしい体験になることが分かった。また、嬉しいだけでなく、不安や悲しさなど様々な感情を感じていたことも分かり、今後も、実施していく中で、子どもの気持ちに寄り添いながら、子どもとともに生き立ちに向き合うことを忘れないようにしなければいけないと感じた。

研究 3「子どもたちのニーズ調査」については、約 49% 子どもにニーズがあることが分かった一方で、知りたくないと感じている子どもも一定数いることも明らかになった。職員としては、できるだけ LSW の実施をしてあげたいと思ってしまうが、子どものペースを最優先に考えることも忘れてはいけないことを改めて感じた。また、子どもたちが生き立ちに向きあいたい

と思えるようになるためにも、安心できる生活環境作りを心掛けることが課題の一つである。

最後に、LSW を実施することは、こどもにとっても、職員にとっても必要な取り組みだということが、全職員の共通認識になっていることが分かった。また、こどもにとって大切な取り組みとなるものであるが、楽しいだけではなく、不安や悲しさを引き起こすものであることも明らかになった。そのため、こどもの安全・安心が保障される環境の中で、サポートを受けながら、実施する必要があることも分かった。したがって、愛染寮にいる間に、安心できる環境で、信頼できる職員とともに、生い立ちに向き合うことが大切であると考え

る。

生い立ちの整理は、自分のアイデンティティを形成することになり、こどもが自分の存在に自信を持つことになる取り組みになっている。LSW をすることで、愛染寮を巣立ち、社会を出た後の生きる力になることを信じ、これからも取り組みを続けていきたい。

#### 参考文献

- (1) NPO 法人おかえり：ライフストーリーワークって何？，2017.
- (2) 才村眞理編著：生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのためのライフストーリーブック，2009.
- (3) 奈良県・才村眞理・奈良ライフストーリーワーク研究会：日々の関わりとライフストーリーワーク～施設職員活用ツール～，2020.

## 《講評》

プロフィール

清水 益 治 (しみずますはる)

### 学歴

奈良教育大学 教育学部 小学校教員養成課程 心理学専攻 卒業  
広島大学大学院 教育学研究科 学習開発専攻 修了 博士(教育学)

### 職歴

奈良保育学院講師、大阪樟蔭女子大学助教授、神戸女子大学准教授を経て、  
現在、帝塚山大学教授

### 主な著書

「図形の大きさの比較判断に関する発達的研究」 風間書房  
「保育心理学」「保育の心理学Ⅱ」「0歳～12歳児の発達と学び:保幼小の連携と接続に向けて」  
「21世紀の学びを創る:学習開発学の展開」「子どもの理解と援助」(いずれも共編著) 北大路書房  
「保育の心理学Ⅰ」「保育の心理学Ⅱ」「保育士等キャリアアップ研修テキスト 幼児教育」(いずれも共編著) 中央法規  
「最新保育士養成講座 第6巻 子どもの発達理解と援助」(共著) 全国社会福祉協議会

### 専門

認知心理学・保育心理学

### 主な社会的活動

生駒市子ども・子育て会議 会長  
社会保障審議会児童部会保育専門委員会委員 (保育所保育指針の改定にかかわる)  
[平成27年12月4日～平成29年12月3日]

## ポスター発表

ポスターは会場に掲示するほか、Web でご覧いただけます。

「第28回宝山寺福祉事業団研究発表会特設ページ」

<https://hozanji-wel.org/publicrelations/research/28th-workshop/>



♥…サービス改善分野    👤…業務改善分野    🤝…地域連携活動分野

### サービス改善分野

No.	施設名	発表タイトル	発表者
1	♥ 愛染寮	子どもへの SNS の取り組み(自分の身を守るために)	井川楓莉
2	♥ いこま乳児院	生い立ちを語るアルバムをつくろう ～LSW に繋げるために～	江頭唯・通山夢未・ 山下純子
3	♥ 極楽坊あすか こども園	食育活動の再検討 ～地域の方と連携した栽培活動を中心として～	辻森萌・古城祐佳
4	♥ あすかの保育園	自分でしたい！が叶う環境づくり ～1歳児の給食コーナー～	溝口由里菜・濱口沙夜香
5	♥ 特別養護老人ホーム梅寿荘・養護老人ホーム梅寿荘	排泄最優先の原則 ～スキントラブル解消なるか？～	喜多蘭・辻村万希・ 勝田大葵・岡本唯哉・ 林篤世
6	♥ 生駒市梅寿荘地域 包括支援センター	高齢者の水分摂取について ～補給のコツやすすめ方の工夫～	長谷川香織
7	♥ 老人総合福祉施設 あくなみ苑	選択食でいつもの食事を楽しみな食事へ ～あの頃の忘れられない味を食べられたら～	井上悟・馬渡清美
8	♥ 特別養護 老人ホーム延寿	座圧測定	西本幸代・今中亮平・ 中森弦介

## 業務改善分野

No.	施設名	発表タイトル	発表者
9	 いこま乳児保育園	スピーディな情報共有	大高優・田村佳奈子・ 竹田月子
10	 はあとぼーと 梅寿荘	ヘルパー同士の情報共有 ～伝える力、読み取る力をつける～	奥垣洋子

## 地域連携活動分野

No.	施設名	発表タイトル	発表者
11	 発達障害者支援 センターでいあー	Q-SACCS で地域支援を見える化しません か？	菅原史登

# アブストラクト

組織活力アップ分野

1

## 子どもへの SNS の取り組み(自分の身を守るために)

井川楓莉(愛染寮)

愛染寮では平成 28 年、入所している高校生からスマートフォンを持ちたいという声があり、児童と職員で話し合いを重ねてきた。当時から SNS トラブルが問題視されていた為、自分の身を守るべく SNS 研修を行い、危険性を理解した上で、スマートフォンを持つようになった。近年、小中学校からタブレットを支給されたり、愛染寮内でも小学4年生以上がパソコンを使用したり、SNS に触れる機会が増えている。その為、年齢に合った内容で SNS 研修プログラムを作成し、取り組んでいる。

子ども達が SNS 研修の内容を理解しているかを測るため、小学4年以上の児童を対象にアンケートを取り、職員には児童の SNS 研修後の SNS に対する意識の変化についてアンケートを取った。

児童からは、ネットの危険性を知ることがいい機会になったという声と SNS についての正しい知識を職員にも知ってほしいという声が上がった。そして全員、身を守ることに繋がったと答えた。

職員からは、SNS 研修の内容は事例を出しており危険性が伝わりやすいという声がある反面、子どもの発達特性を考え、視覚的に分かりやすく伝えた方がいいという意見も出た。

SNS 研修を実施してきた過程と、これからの課題はポスターをご覧ください。

2

## 生き立ちを語るアルバムをつくろう ～LSW に繋げるために～

江頭 唯・通山 夢未・山下 純子(いこま乳児院)

乳児院の子どもたちにとって、個人アルバムは成長と生活の記録であり、自分の生き立ちを振り返る際に開く大切なものである。近年児童養護施設等で取り組まれているライフストーリーワーク(LSW)でも活用されている。

一方、当院のアルバム作成マニュアルには LSW を視野に入れた目的設定が無かった為、誰の為に、何の為にアルバムを作るのかが不明確であった。

そこで、保育者全員が LSW 研修を受講し、従来のアルバム作りを振り返る機会を設け、研修前後にアンケートを実施し、既存のマニュアル等を見直した。

取り組みの結果、アルバムについて保育者間で話し合う機会が増えたことで、研修後に作成した個人アルバムでは、子どものその時特有の行動や言葉の記録が増える、面会時の雰囲気がか

る写真が増える等、より子どもの様子が振り返り易くなる工夫が多く見られた。今後も乳児院で暮らす子どもたちの生い立ちを語る記録の在り方について模索していきたい。

### 3

## 食育活動の再検討 ～地域の方と連携した栽培活動を中心として～

辻森萌・古城祐佳(極楽坊あすかこども園)

極楽坊あすかこども園では食育活動を通じて、子どもたちがより食材に関心を持ち、食べる意欲をもつことを目指して活動内容の再検討を行った。中でも栽培活動に着目し、内容を充実させられるよう、地域の方と連携しながら活動を進めた。以前は栽培活動の回数が年度によって違い、収穫以外の体験も少なかったが、提案や助言を受けたことで、栽培する野菜の種類が増加し、1年を通じて畑で活動が行えるようになった。さらに、栽培に詳しい方が関わってくださったことで、子どもたちが新たなことに気づく機会が増え、「さつまいものつるの調理」「かぶの間引き」といった新しい活動も取り入れることができた。様々な体験を積み重ねる中で、栽培に関する話題が増え、野菜をテーマにした制作を作品展で展示する学年もあった。今回の取り組みは、子どもたちの食材への関心を高め、野菜を食べたいという気持ちを育むことにつながった。

### 4

## 自分でしたい！が叶う環境づくり ～1歳児の給食コーナー～

溝口由里菜・濱口沙夜香(あすかの保育園)

1歳児の子どもたちは自我が芽生え、自己主張が増え、なんでも自分でしてみたいくなる。保育園での給食時には、「保育士がエプロンをつける⇒食事をする⇒おしぼりで口を拭く⇒新しい服に着替える」という流れがある。4月当初は保育士が援助を行うことが多かったが、少しずつ保育士の姿を真似してエプロンやおしぼりを自分で取ろうとする姿が顕著になってきた。

そこで、エプロンやおしぼり入れに個人マークをつけることや、ウォールポケットを使って子どもの目線に合わせて設置するなど、子どもたちが自分たちで用意しやすいように環境を工夫した。

その結果、子どもたちにとっての導線がよくなり、自分でできることが増えた。また、子どもが保育士の援助を待つ時間が無くなり、保育士にも余裕ができ一人ひとりとゆったりとかかわることに繋がった。

## 5

## 排泄最優先の原則 ～スキントラブル解消なるか？～

喜多蘭・辻村万希・勝田大葵・岡本唯哉(特別養護老人ホーム梅寿荘)・  
林篤世(養護老人ホーム梅寿荘)

---

私たち梅寿荘では、排せつケアに関する技術向上とサービス改善のため、2020年からは排泄委員会を立ち上げ、活動してきました。おむつ用品の業者の方(リブドゥコーポレーション)にも委員会に参加いただき、オムツ用品を個々のご利用者にあったサイズ、種類を精査して提供したり、排せつ用品を正しい当て方で使用できるよう手技の確認をしたり、スキントラブル予防についての学びや、排せつのメカニズムに関する学び、陰部洗浄方法や、拘縮のある方々への安全な介助方法などについて学び、発信し、チームで実践できるよう取り組んでまいりました。今回のポスター発表では、スキントラブルを起こしやすいご利用者の事例検討・分析を通して、様々な課題の発見と、今後の展望について学ぶ機会となりました。排泄最優先の原則の再確認と、スキントラブルを未然に防ぐプロセスについて、施設としてチームケアで取り組んでゆけるよう、今後も発信を続けてゆきます。

## 6

## 高齢者の水分摂取について ～補給のコツやすすめ方の工夫～

長谷川香織(生駒市梅寿荘地域包括支援センター)

---

水分摂取の必要性は、近年の猛暑日が続くような環境の変化や、認知症・脳血管障害を引き起こす誘因となりうる健康面の観点からもその重要性が問われ、報道などでも誰もが知るところとなっています。私たちが関わりを持っている高齢の方々へは、実際にどれくらいの水分量を摂取されているのか、また水分摂取の重要性をどう意識されているのか、個別にケアプラン作成時に聞き取りを実施しアドバイスをを行っています。しかしその結果を活用して、水分摂取についての啓発を検討してみたことはありませんでした。

そこで今回、支援継続中の100名に聞き取りした結果を集め、それを基に実際に摂取されている水分量や種類、水分摂取の場面で見えてきた実態を一旦整理して、補給のコツやすすめ方の工夫など、今後地域での啓発アプローチに繋げていくことができると考えました。

## 7

## 選択食でいつもの食事を楽しみな食事へ ～あの頃の忘れられない味を食べられたら～

井上悟・馬渡清美(老人総合福祉施設あくなみ苑)

生きる為には欠かせない日々の食事、その大切な毎日の食事を単に生きる為にだけではなく、少しでも豊かで楽しい生活を維持できるよう、素敵で楽しみなものにできないかと考えました。利用者様の忘れられないあの時の味、旅行先で食べた思い出の食事、自身の出身地の郷土料理を食べる事ができないか、この様な想いを食べる楽しみとして、もっと喜んで頂きたいと思い、選択食を開始することになりました。利用者様からお話を伺うと、昔住んでいた土地の郷土料理の話や社員旅行で食べたあの味が忘れられない、といったお話から選択食の献立を決めました。食後にアンケート調査を行い、9割以上の方が満足されている結果となり、利用者様から選択食が好評である事がわかりました。また、焼き鯖の煮つけが一番美味しかった。あっさりしていてとても美味しかった。昔を思い出して少しほっこりした。などのお話を聞き職員も選択食を通じて利用者様とコミュニケーションを深めることができました。今後も選択食を通じて豊かで楽しい生活を提供して行きたいと思えます。

## 8

## 座圧測定

西本幸代・今中亮平・中森弦介(特別養護老人ホーム延寿)

2016年にシーティング委員会が発足して以来、姿勢が崩れている利用者様を安楽な姿勢で過ごして頂き、表皮剥離や褥瘡を予防していくにはどのようにすれば良いかを検討し、改善を進めて参りました。職員の意識が高くなる一方、経験・感覚などにより差が生じるようになりました。そこで、「体圧の見える可」が行える座圧測定器を導入することになりました。今まで行っていたシーティング・ポジショニングが利用者様にとって、安楽な姿勢かどうか座圧測定器を使って画像で確認でき、どこに問題があって何が出来ていないのかが明確になり、情報共有することで適切なシーティング・ポジショニング、クッションの選定が出来るようになりました。座圧測定器を使っての今後の課題や活用方法も明確になりました。座圧測定器の活用方法はポスターにてご覧下さい。



9

## スピーディな情報共有

大高優・田村佳奈子・竹田月子(いこま乳児保育園)

本園における保育士の人員不足・業務過多・情報共有・休憩時間の確保の問題に試行錯誤しながら取り組んだ。早朝や夕方の合同保育の中で、保護者への申し伝えは重要である。他のクラスの情報も知っていないといけない為、日々の保育の中で起こった出来事(怪我や体調面等)を共有する事が必須となる。その情報を迅速に共有する為に本園では朝礼や昼礼を行ってきた。だが、毎日の会議で情報共有はできたものの、保育士の休憩時間の確保や他の仕事が進まない等、新たな問題が現れる。その中で迅速に情報を共有できるツールとして LINE の使用を試みる。各クラスの日々の保育、その他の業務もあり、子どもの午睡中と言っても保育士の仕事は多い。その中で LINE による情報共有は迅速で正確に伝わり再確認もできる等、メリットが多い。数週間使用し、保育士へのアンケートを実施。様々な見方からデメリットも浮き彫りになる。一つ一つの問題点を改善してきた結果を報告する。

10

## ヘルパー同士の情報共有 ～伝える力、読み取る力をつける～

奥垣洋子(はあとぼーと梅寿荘)

訪問介護サービスを利用者に提供した際、利用日、提供時間、提供区分や、提供した介護サービスの内容、利用者の様子などを「ヘルパー活動記録票」に記録します。

活動記録票は、サービス提供に必要不可欠なものです。一人の利用者に対して、複数のヘルパーがケアに関わるため、毎回のサービス提供の前後に活動記録票を読むことで、ヘルパー間で情報共有するために用います。当日のサービスの項目をチェックするだけでなく、訪問した日に体調、その日の出来事や注意点、利用者と話した内容など、細かくわかりやすく記載することで、利用者の状況を把握することができます。しかし、読んでも内容を理解できない、記録をしないで、口頭で報告するなど、共有できないことがあります。記録に残すということは、大切であり、読んでも内容が理解できるように、記録のとり方、読み方を考えることにしました。

## Q-SACCSで地域の支援を見える化しませんか？

菅原史登(奈良県発達障害者支援センターでいあー)

発達障害者支援センターは県から委託を受けて発達障害に関わる様々な支援をしています。当事者やご家族への個人単位の支援だけでなく、より広い視点で地域全体への支援も役割になっています。でいあーでは地域を支援する方法として「Q-SACCS(発達障害の地域支援システムの簡易構造評価)」を活用した取り組みを始めました。Q-SACCSとは市町村ごとの社会資源や支援の流れをシートにまとめ、特徴や課題を見える化できるツールです。でいあー職員がコーディネートしながら、行政職員や障害支援に関わる支援者・保護者の方がシートを作成し、発見した特徴や課題から取り組めるアイデアを考えています。また、子ども家庭庁の協力を得て市町村職員を対象にQ-SACCSの研修を行いました。既に取り組んでいる市町村の発表も行い、より多くの地域に広げていきたいと考えています。実際の取り組みについては、ポスターと解説動画をご覧ください。

# 宝山寺福祉事業団研究発表会 ～福祉現場からの報告～ 発表一覧表

No.	施設名	職名	発表者名	タイトル	備考
1	仔鹿園	主任保育士	岡本とも子	ポータージョプログラムを導入した保育実践について	(第1回) 4F研修室
2	愛染寮	保育士	垣見麻弥	発達に遅れの見られる子どもへの対応	
3	あすかの保育園	保育士	山本美樹	子どもの発達に即した描画について	
4	梅寿荘	副主任	川崎由美	ケアプランの実践と展開	介護保険制度 (No.1)
5	極楽坊保育園	保育士	樋上佳代	おさなご・今昔	わらべ歌
6	(梅)介護支援センター	主任ヘルパー	水口靖子	介護保険制度に向けて (No.2) 24時間ヘルパー派遣について	(第2回) 研修室
7	いこま乳児保育園	主任保育士	吉本美代子	恵まれた環境の中でおおきくうれしいネ	散歩保育
8	いこま保育園	保育士	植嶋・中尾・山田	給食と子ども達	
9	いこま乳児院	保育士	南和江	赤ちゃんのもうひとつのお家 ～最近の乳児院機能～	
10	平城児童センター	ボランティア主任	伊豫正展・他	ボランティアとセンターのパートナーシップについて	
11	極楽坊保育園	保育士	米田恵美子	地域のお年寄りとの交流の実践について	(第3回) 文化ホール
12	梅寿荘	介護支援専門員	田尻信子	ケアプランに対する取り組みについて	介護保険制度 (No.3)
13	あすかの保育園	保育士	尾鼻登美子	ひとりひとりを大切にしたい集団保育について ～表現遊び～	
14	仔鹿園	保育士	中井加苗	知的障害児に対する音楽療法の効果について	
15	愛染寮	指導員	山下登生	愛染寮における自立支援の方策について ～BS活動より～	ボーイスカウト (BS)
16	デイセンター寿楽	介護福祉士	津田将文	訪問入浴のあゆみとこれから	(第4回) 文化ホール
17	(梅)介護支援センター	介護支援専門員	上野佐紀子	介護保険が始まって	介護保険制度 (No.4)
18	いこま保育園	保育士	福井千春	みんなともだち 健康な身体づくり	

19	いこま乳児保育園	保育士	喜多由希子	応援します 子育てを楽しむために	子育て支援センター
20	いこま乳児院	保育士	矢島智穂	乳児院における親子の絆について	
21	あくなみ苑	栄養士	飯島弘子	食事の外部委託化が進む中での施設栄養士の役割	(第5回)文化ホール
22	平城児童センター	ボランティア	山本・谷口・渡邊	児童センターとしての取り組み ～35キ口のその先には～	
23	仔鹿園	コーディネーター	谷口圭永子	地域療育等支援事業をスタートして ～今までの取り組みとこれから～	
24	梅寿荘	主任生活相談員	田中聡	ユニットケアへの取り組み ～よりそう介護で個性がみえてくる～	梅寿荘移転改築中
	記念講演	帝塚山大学短期大学部名誉教授	青山茂先生	奈良学からみる福祉の今昔	
25	極楽坊保育園	保育士	前田紀美子	心おどるリズムの体感	(第6回)文化ホール
26	梅寿荘デイセンター	副主任生活相談員	伊藤智宣	処遇のマンネリ化をいかに改善するか ～利用者の声から～	
27	やすらぎの杜延寿	生活相談員	壺岐誠	即応性のある計画の必要性を考える ～チャンスを生かすケア…～	
	記念講演	大阪樟蔭女子大学人間学部教授	菊野春雄先生	寄り道のすすめ	法人認可50周年講演
28	梅寿荘	生活相談員	松岡利和	小規模生活単位型(個別ユニット)特養の取り組みと将来	(第7回)文化ホール
29	はあとぼーと荘	副主任ヘルパー	岩井香奈子	利用者・家族の希望をかなえるホームヘルプサービスの可能性	
30	あくなみ苑	主任生活相談員	窪田ミサ子	ケアハウスの現状報告と今後の課題	
	ちよぼらねっとま	ちよぼらねっと表代	辻村泰範	みんなが主役のまちづくり ～ちよぼらねっといこまの活動について～	
	記念講演	天理大学人間学部人間関係学科	渡辺一城先生	地域を支える福祉活動	
31	あすかの保育園	保育士	小林美香	しなやかな心と身体をめざして ～保育の中でのリズムの遊び～	(第8回)せせらぎ
32	いこま乳児院	看護師	関口直見	病虚弱児保育の実践 ～よりよい保育のために～	

33	あすかの・いこま乳 児院・いこま・極楽	栄 養 士			楽しく食べる子どもに ～食育の現場から～	保育園栄養士チーム
	記念講演	大阪厚生年金病院 医師	高田 慶心 先生		生きる力をはぐくむ ～こどものころ見えますか？	
34	デイセンター寿楽	介 護 職 員	飯 塚 耕 平		一人ひとりのニーズに合ったケアを目指して	(第9回) 文化ホール
35	やすらぎの杜延寿	生活相談員	今 井 康 順		「関わること、生活環境をつくること」そこから見えた認知症ケア	
36	あくなみ苑	管理栄養士	豊 田 綾 子		チームによる食支援 ～栄養ケアマネジメントを通して～	
37	ちよボラねっと まい	代 表	辻 村 泰 範		ちよボラで築く、みんなが主役のまちづくり	
	記念講演	滋賀医科大学医療 文化講座	早島 理 先生		「死ぬこと、生きること」 ～より充実して生きるために～	
38	いこま保育園	看 護 師	吉 本 美 代 子		病後児保育室からの報告 ～愛をつむぐいちごるーむ～	(第10回) 文化ホール
39	こども支援センター あすな	保 育 士	竹 田 智 代		地域に根ざしたサービスを目指して ～あすなろのあゆみ～	
40	いこま乳児保育園	保 育 士	田 村 佳 奈 子		ちいさな手は無量大 ～魅力いっぱいへの感触あそび～	
	記念コンサート	マリオネット	湯 浅 田 剛 士		ポルトガルギター&マンドリン演奏	
41	梅寿荘地域包括 支援センター	看 護 師	西 山 和 子		自分らしく生きる ～介護予防支援の実際から見えてきたこと～	(第11回) 文化ホール
42	グレイセンタ ー家	相 談 員	二 宮 真 理 子		その人を知ることから個別ケアが始まる ～笑顔あふれる生活を送るために～	
43	特別養護老人ホーム 梅寿	ユニットリーダー	松 浦 たかね		ユニットケアにおける個別入浴援助 ～施設での入浴を、家と同じように入りたい～	
	記念講演	帝塚山大学教授	三木善彦先生		内観で心も体も晴れやかに ～内観療法の実際～	
44	ちよボラ探偵団		田 中 聡		「ちよボラねっといこま」活動報告	(第12回) 文化ホール
45	愛染寮	心理相談員 児童指導員	峯 崎 優 美 鈴		人と人とのつながりの「こちよよさ」を目指して ～児童養護施設における『ふれあいたいそう』のこころみ～	
46	仔鹿園	保 育 士	木 村 友 美		「障がいのある子どもへのリズム運動のとりくみ」 ～豊かな発達を目指して～	

47	極楽坊保育園	保育士	中美恵	「体育あそびにおける幼児のこころの発達と保育者の役割」 ～サーキットあそびにおける対人葛藤の経験から見えてくるもの～	
	記念講演	池谷幸雄 倶楽部代表	池谷幸雄 先生	「夢は果てしなく永遠に」	
48	デイセンター寿楽苑	介護職員	下西直子	「回想からの取り組み」～感動・感激を引き戻す～	(第13回) 文化ホール
49	あくなみ苑	主任生活相談員	田中将史	「認知症利用者への学習療法の効果」 ～いつも満点、笑顔で頭の体操～	
50	やすらぎの杜延寿	介護職員	矢野健太郎	「笑顔が教えてくれた最適な排泄ケア」 ～スツキリ! 爽快!! 心も軽い!!～	
51	生駒市梅寿荘地域 包括支援センター	社会福祉士	岩井香奈子	「ちょぼラねっといこま活動報告」～「ちょっと」がキーワード～	
	記念講演	総合人間研究所	早川一光 <sup>かすて</sup> 所長	「豊の上で大往生」	
52	基調講演	帝塚山大学 現代生活学部	鶴宏史 先生	なかまといっしょに育ち愛	(第14回) 文化ホール
53	いこま乳児院	保育士	泉多貴子	たくましく生きる根っこの力～食育を通して～	
54	こども支援センター あすな	保育士	田見繁子	期待から広がるこころの育ち～共感しあう楽しさ～	
55	あすかの保育園	保育士	村田麻良	みんないっしょにワクワクドキドキ!! ～ごっこあそびでつながって～	
	癒しのコンサート ～朗読と音楽の世界～	フリーアナウンサー た・ピエノ オ・ボ・エ	山下雄栄 小田多裕 廣瀬美	「ハートで伝える語り方」	
56	総合施設やすらぎの杜 延寿	介護職員	大内知子	体の健康と口腔ケア～ブラークコントロールで病気予防～	(第15回) ISTAはばたき
57	特別養護老人ホーム 梅寿	ユニットリーダー	上平昇兵	施設におけるターミナルケア～梅寿荘に帰りたい～	
58	梅寿荘デイセンター	生活相談員	鶴川知子	音楽療法～ひびけ! 心に～	
59	はあとぼーと 梅寿	主任ヘルパー	斉藤洋子	ひとり暮らしの高齢者を支えるために ～暮らしを見守るヘルパーの役割～	
	シンポジウム	生駒市福祉支援課 保健師 生駒市自治連合会 会長 生駒市ハートフルプラン 委員長 宝山寺福祉事業団 理事長 生駒市梅寿荘地域包括支援センター	美子 巨範 明宏 泰香 中堂屋村井 藤守辻岩	わたしたちが住みたい 生駒 ～高齢になっても安心して暮らせる地域包括ケア～	

60	児童養護施設 愛染	家庭支援専門 相談員	菅尾明史	社会的養護の担い手としての児童養護施設とファミリーソーシャル ワーカーの役割	(第16回) せせらぎホール
61	奈良県発達障害支援 センターであー	相談員	大西和幸	支援から見える発達障害のある子どもへの関わり	
62	いこま保育園	保育士	尾植初平	おいしいね 楽しいね みんなでつくる食育の和	
	記念講演	生駒市教育委員会 教員	早川英雄 先生	すこやかな成長を願って	
63	老人総合福祉施設 あくなみ苑	生活相談員	酒井貞宗	高齢者施設における介護職員の働きやすい環境とは	(第17回) 文化ホール
64	デイセンター憩の家	主任生活相談員	岩國和悠	目標にむかって！ ～山登りへの実践～	
65	デイセンター寿榮	生活相談員	下西直美	通所介護でできる日常生活の向上への取り組み ～介護職・看護職で行う個別機能訓練～	
66	やすらぎの社延寿 極楽坊保育園	管理栄養士	上山紗依美	食のバリアフリー化 ～乳幼児から高齢者の味の統一を目指して～	
	記念講演	奈良国立博物館 学芸部長	西山厚氏	光明皇后と奈良時代の福祉	
67	いこま乳児院	保育士	廣津小百合	「わたしの居場所みつけた」 ～子どもたちを育む『巣』の力～	(第18回) せせらぎホール
68	児童発達支援いっぽ	保育士	岡田美和	「子どもの発達のつまずきへの対応」 ～やっただー！ できるんだ！ を支援するために～	
69	いこま乳児保育園	保育士	木村美貴子	「あたたかいぬくもりを感じて」 ～世界にひとつだけの手作り人形を通して～	
70				ポスターセッション (口頭発表) No.1 ～ No.19	
	記念講演	絵本あれこれ研究家	加藤啓子 先生	「子どもと一緒に、もっと絵本を楽しむ」 ～これまでとちよっと違う絵本の読み方選び方～	
71	デイセンター延寿	リリーダ サブリリーダ 介護職員	黒葛原厚子 笠川映子 客野英樹	みんなで笑って楽しくアンチエイジング ～延寿いきいき倶楽部が挑んだ1000日間～	(第19回) せせらぎホール
72	梅寿荘居宅介護 支援センター	介護支援専門員	林田佐知子	わが町の地域ケアを考える	
73	老人総合施設 あくなみ苑	主任生活相談員	小森康志	～認知症になっても住み慣れた地域で～ あくなみ苑が出来る地域貢献 ～高齢者が地域で孤立しない為に支える～	

74	記念講演	インストラクター	藤原宏美 先生	ポスターセッション (口頭発表) No.1 ~No.20 和こころから学ぶ、究極のアンチエイジング お能でヨガストレッチ	
75	極楽坊保育園 児童発達支援センター 鹿園	保育士	伊藤 佐智子	運動好きの子どもを育てるために ～楽しく運動ができる環境づくりについて～ 「子育て力を高める」 ～ポーテジブプログラムの活用～	(第20回) ならまちセンター
76	児童発達支援センター 鹿園	保育士	伊佐 千代子		
77	こども支援センター あすなろ	主任 指導員	佐伯 佐知 安西 貴志	「児童発達支援の中で社会性を育てる遊び」 ～保育計画プロジェクトのとりにくみ～	
78				ポスターセッション (口頭発表) No.1 ~No.21	
	講演会	元興寺住職	辻村 泰善 師	「菩薩の道」	
79	養護老人ホーム 梅寿荘	支援員	河合 治	「自立と活動につなげる環境作り」 ～共用スペースの再構築～	(第21回) せせらぎホール
80	総合施設 やすらぎの杜 延寿	介護職員	宮本 賢二 西野 公章	「安楽の姿勢を作ることによる生活の変化」	
81	老人総合福祉施設 あくなみ苑	介護主任	辻野 勝久	「介護ロボット導入による介護現場の未来」 ～ご利用者・職員の笑顔が絶えない現場を目指して～	
82				ポスターセッション (口頭発表) No.1 ~No.18	
	講演会	健康運動指導士	大谷 恵子	「らくらく体操から17年」	
83	児童養護施設 染寮	児童指導員	玉田 周平	じぶんの気持ちとひとの気持ち ～「セカンドステップ」に取り組んで3年～	(第22回) 生駒市コミュニティセンター
84	あすかの保育園	保育士	内田 妙子 林 美穂	「楽しいあそび・豊かな育ち」～七感を使って～	
85	いこまこども園	副主幹 保育教諭	辰巳 草子 坪井 美咲	「メンター制度を取り入れた 職員育成」 ～見守りの中での子育て～	
86				ポスターセッション (口頭発表) No.1 ~No.14	
	記念コンサート		さわむらしげはる と にこにこ楽団	～笑顔が広がる うたあそび・おとあそび～	
87	デイセンター 寿楽	相談員	中島 淳	2025年問題に立ち向かえ! ～デイサービスセンター連携によるホスピタリティ向上への道～	(第23回) 生駒市コミュニティセンター

88	居宅介護支援センター延寿	介護支援専門員	兼澤依子	自らが望む、人生の最終段階の医療・ケアについて話し合ってみませんか？ ～アドバンス・ケア・プランニング（ACP）を実現するためにケアマネージャーができること～	
89	はあとぼーと梅寿荘	主任ヘルパー	金田智子	最期まで笑顔で寄り添う介護 ～在宅での看取りについて～	
90	シンポジウム			ポスターセッション（口頭発表） No.1～No.13	
91	いこま乳児院	保育士	江頭唯	在宅での看取り 双方向コミュニケーションの充実 ～ベビースサインを実践して～	（第24回） 動画配信
92	いこま乳児保育園	保育士	龍田千夏	自然との触れ合いが育てる子どもの力 ～園庭遊びを通して保育士が語り合う～	
93	奈良県発達障害者支援センターでいあー	相談員	中村匡志	この町で暮らしたい、もう一度つながりを持つための支援 ～触法障害者における社会復帰の取り組み～	
94				ポスターセッションプレビュー（口頭発表） No.1～No.15	
95	特別養護老人ホームあくなみ苑	介護主任	松本直大	「タブレット端末導入による介護現場の変化」 ～脱紙媒体！記録業務に追われるな！！～	（第25回） 生駒市図書館
96	特別養護梅寿荘老人ホーム梅寿荘	介護主任	堀本卓史	「認知症の行動・心理症状（BPSD）解消に向けた事例研究」 ～タイプ別ケア・身体不調へのアプローチ～	
97	特別養護老人ホーム延寿	介護副主任	大平達也	「情報通信技術の活用」 ～眠りSCANの分析から見えたこと～	
98				法人各施設のポスターセッションプレビュー（口頭発表）No.1～No.17	
	記念コンサート		鈴木智貴氏	ウクレレの世界へ	
99	こども支援センターあすなろ	保育士	杉賀子	「マカトンを使ってコミュニケーションをひろげよう」 ～わかってもらええとうれしいな～	（第26回） 奈良公園バスターミナル
100	児童発達支援いっほ	主任	長野智子	「児童発達支援の役割」 ～いっほ11年目の検証と今後の展望～	
101	極楽坊あすかこども園	保育教諭	山中真智子	「好奇心や探求心の芽生えを育む」 ～3歳児の水と関わる遊びを通して～	
102				法人各施設のポスターセッションプレビュー（口頭発表）No.1～No.14	
	記念講演	ビジョントレーニングプロトレーナー	西嶋加寿子氏	「遊びながら成長しよう！」 ～目と脳と体をつなぐトレーニング～	

103	シヨートステイ延寿	介護職員	岡田正史	在宅生活における排泄支援 ～シヨートステイでの排便コントロールの取り組み～	
104	梅寿荘在宅介護支援センター 居宅介護支援センター延寿	主任介護支援 専門員	斉藤洋子 中田工三子	居宅介護支援事業所におけるBCPの取り組みについて ～地域に繋がる安心感を目指して～	
105	梅寿荘デイセンター デイセンター延寿	生活相談員	中井耕大 矢野健太郎	サービスマナー行動指針の実践 ～接遇マナー・ホスピタリティの向上～	
106				法人各施設のポスターセッションプレビュー（口頭発表）No.1～No.14	
	記念講演	健康運動指導士	大谷恵子氏	笑顔は副作用のないお薬	

# 社会福祉法人 宝山寺福祉事業団の成り立ちと歩みの概要

昭和21年10月  
(1946年)

真言律宗大本山宝山寺に宝山寺社会事業部を創設。辻村泰圓責任者となつて、緊急援護法による生活困窮者生活援護施設として、愛染寮を生駒町谷田175番地大乘滝寺内に（庫裡を開放して）開設、当初定員15名でスタート。昭和23年児童福祉法施行と同時に児童養護施設となり、その後順次増改築を重ねて現在（定員60名）に至る。

昭和24年 9 月  
(1949年)

南都七大寺の一つ元興寺（極楽坊）の小子坊を同寺境内に於て移転改装して、児童福祉法による保育所として極楽坊保育園を創設、当初定員80名でスタート。その後増築、移転、改築を重ねて現在（定員300名）に至る。

昭和24年10月  
(1949年)

宝山寺境内の一部を開放して、児童福祉法による児童厚生施設として宝山寺児童遊園を創設。その後現在地に移転。

昭和27年11月  
(1952年)

宝山寺社会事業部から、社会福祉事業法による社会福祉法人宝山寺福祉事業団へ移行し、上記3施設を設置経営する法人として厚生大臣より認可。初代理事長辻村泰圓（その後松本実道総裁が理事長に就任するとともに常務理事に）就任。さらにこれより後、以下の福祉施設を増設し、現在に至る。

昭和29年 6 月  
(1954年)

児童福祉法による保育所としていこま保育園を創設、当初定員110名でスタート。その後増築、全面改築を行って現在（定員250名）に至る。

昭和42年10月  
(1967年)

児童福祉法による乳児院としていこま乳児院を創設。定員20名でスタートし、現在に至る。

昭和46年 4 月  
(1971年)

児童福祉法による保育所としていこま乳児保育園を創設。定員60名でスタートし、現在に至る。

昭和47年 2 月  
(1972年)

法人機関誌ひめゆり通信を発刊し、現在（140号平成26年2月発刊）に至る。

昭和47年 8 月  
(1972年)

老人福祉法による特別養護老人ホーム梅寿荘を創設、当初定員70名でスタートし、その後増改築を行い、平成15年4月現在地に移転。

昭和52年 4 月  
(1977年)

社会福祉事業法による療育相談施設、障害児福祉センター奈良仔鹿園を創設。同時に、児童福祉法による知的障害児通園施設仔鹿園を併設、定員30名でスタート。現在児童発達支援センター仔鹿園定員57名、療育相談事業を併設。

昭和53年 4 月  
(1978年)

児童福祉法による児童厚生施設として平城野外活動研修センターを開設し、ひきつづいて2年後に同センター内に平城児童センターを創設し、現在に至る。

昭和53年 5月 (1978年)	法人常務理事辻村泰圓急逝（行年59歳）。辻村泰範これを継承。
昭和57年 4月 (1982年)	児童福祉法による保育所としてあすかの保育園を創設。定員60名でスタートし、現在（定員90名）に至る。
昭和57年10月 (1982年)	法人認可30周年記念事業として、記念図書「縁」の刊行、施設紹介絵葉書の発行、記念の日時計の設置等を実施。
平成 2年 4月 (1990年)	法人内外関係者の社会福祉意識昂揚のための前田記念福祉基金設立。その後、公益事業福祉基金として現在に至る。
平成 2年 6月 (1990年)	愛染寮児童居住用と在宅老人デイサービス用に供するための合築建物桃李館を新設、法人事務局等も加わり、それぞれの機能を発揮して現在に至る。
平成 3年 2月 (1991年)	桃李館内の梅寿荘デイセンターで在宅介護支援センターの業務を開始。
平成 3年 6月 (1991年)	ヘルパーステーション はあとぼーと梅寿荘創設。
平成 4年 5月 (1992年)	日本スリランカ仏教福祉協会設立。法人本部に事務局を置く。
平成 8年 4月 (1996年)	デイセンター憩の家（認知症対応型通所介護事務所）創設。
平成 8年10月 (1996年)	創立50周年記念式典。記念誌「この五十年」、記念モニュメント設置、愛染之塔・梅寿之塔を建立。愛染寮杉の子荘全面改修を実施。
平成11年 3月 (1999年)	生駒市デイセンター寿楽開設。（生駒市指定管理事業）
平成11年 6月 (1999年)	ヘルパーステーション はあとぼーと開設。
平成11年 9月 (1999年)	松本實道宝山寺住職・法人理事長逝去、大矢実圓が宝山寺住職・法人総裁、辻村泰範が理事長に就任。
平成12年 4月 (2000年)	老人総合福祉施設あくなみ苑が宝山寺福祉事業団の委託経営となる。
平成13年 4月 (2001年)	老人総合福祉施設やすらぎの杜延寿を創設。特養定員80名、ショート20名、ケアハウス30名、デイセンター・ヘルパーステーション等
平成14年10月 (2002年)	日本生命財団高齢社会福祉助成事業（3年継続）「ちょボラねっといこま」開始。

平成15年4月 (2003年)	梅寿荘老朽移転改築事業完了（特養80名、養護20名、ヘルパーステーション）
平成15年11月 (2003年)	生駒南在宅介護支援センター開設。
平成16年4月 (2004年)	児童デイセンター（児童発達支援センター）こども支援センターあすなる開設。
平成18年1月 (2006年)	奈良県発達障害支援センター であー開設。
平成18年1月 (2006年)	いこま保育園にて病後児保育（いちごるーむ）開始。
平成18年4月 (2006年)	生駒市梅寿荘地域包括支援センター開設
平成21年3月 (2009年)	総合支援センターあずさ開設（児童発達支援センターあすなる あずさ、地域包括支援センター、居宅介護支援センター、ヘルパーステーション、地域小規模児童養護施設愛染寮あずさ）
平成21年4月 (2009年)	児童発達支援事業 ばんび開設。
平成23年4月 (2011年)	愛染寮すぎの子荘、いこま乳児院 老朽改築。「すぎのこ」新築移転。
平成24年3月 (2012年)	こども発達支援「いっぽ」開設。（奈良市委託事業）
平成25年4月 (2013年)	児童発達支援センター こども支援センターあすなる 旧乳児院改築移転。
平成26年4月 (2014年)	いこま乳児保育園全面改築事業完了。
平成29年4月 (2017年)	いこま保育園が認定こども園としていこまこども園となる。
平成30年7月 (2018年)	奈良県発達障害支援センターであーが奈良仔鹿園内から磯城郡田原本町の奈良県障害者総合支援センター内に移転。
平成31年3月 (2019年)	いこまこども園、乳児棟完成(定員290名)。
令和3年4月 (2021年)	極楽坊保育園、隣接する奈良市立飛鳥幼稚園の閉園に伴い、幼保連携型認定こども園へ移行し、名称を「極楽坊あすかこども園」と改称。

令和5年9月  
(2023年)

極楽坊あすかこども園、旧飛鳥幼稚園敷地に新園舎を建設して移転。  
児童発達支援いっぽも移転し、併設となる。



## 宝山寺福祉事業団研究発表会発表資料

発行日 令和7年1月26日

発行者 社会福祉法人宝山寺福祉事業団  
〒630-0257 奈良県生駒市元町2-14-8  
tel.0743-74-1172 fax.0743-74-1911  
<http://hozanji-wel.org>

印刷所 大倭印刷株式会社



